

ISSN 0910-3090

國語問題協議會報

平成二十三年十二月十五日發行

國語國字

第百九十六號

目次

第八十八回講演

保田與重郎と和歌

桶谷 秀昭

「日本語と日本のおと」(藍川由美隨聞記)

山田 弘

寄稿

國語問題の變化と變質(一)

若井 勳夫

契沖と悉曇

谷田貝常夫

ローマ字と長音

上西 俊雄

日中英ことばの雜學(三)

高田 友

「今昔秀歌百撰」拾遺

四宮正貴・相田滿・松本哲夫・山本直人・蔡焜燦

和歌投稿(東日本大震災鎮魂の歌)

安東 路翠

和歌「聖慮」高祖道元の祈り

谷田貝常夫

後書

近藤 祐康

題字・挿書

近藤 祐康

48 47 46 40 36 32 28 19 13 1

保田與重郎と和歌

桶谷秀昭

ただいま御紹介に與りました桶谷秀昭です。今日は福島の方からわざわざ来ていただいて、御期待に添へるやうな話ができるか、心もとないのですが、できるかぎり努めてみようと思ひます。

私の題は「保田與重郎と和歌」でありまして、「保田與重郎の和歌」ではありません。保田與重郎は若いときから和歌を作つてをり、作歌は晩年まで持續してゐますが、いはゆる歌人ではありません。餘技として歌を作つてゐたのかといへば、さうではありません。もつと切實なものがあつたと思ひます。

保田與重郎は自分の仕事を、何と呼んでゐたか、自分のことを何と呼んでゐたか、草莽の「文人」とか「詩人」とか呼んだことはありますが、文藝批評家と呼んだことは一度もない。いはんや、歌人と呼んだこともない。

しかし彼はまぎれもない文人でありました。ついでなが

ら、文藝批評家だの作家だのいふ呼稱は、近代の日本文壇でチャアナリズムが生んだ慣習的な呼稱でありまして、普遍的な意味をもたないと思ひます。日本の文壇と讀者市場では、小説といふものが異常に人氣があり、それが文學の中心であるかの觀がありますが、まことに不思議なことで、東アジア圏で文學といへば、詩と文章をいふので、小説は文學ではありません。讀み物、あるいは稗史といひまして、歴史のまがひものとみなされてをります。西歐でも、小説がノベルと呼ばれて文學の中心になつたのは十九世紀で、二十世紀になると降り坂で、今日、その使命はほぼをはつたとみていいでせう。

日本文學で詩といふのは、和歌であり、萬葉集の長歌から分かれた短歌が、新古今集にいたつて幽玄體の詩風に成熟しました。また、懷風藻に始まる漢詩文の傳統が併存します。近代になつても、漢詩は盛んで明治三十年代は萬葉集以來、最も盛況でありました。漱石の漢詩はさういふ盛況を背景としてゐます。

文章といふのは、平安朝の批評文學である枕草子から中の徒然草、方丈記といった隱遁詩人の作品があります。

つまり詩と文章が文學の實體であります。保田與重郎は文藝の批評家といはれてをりますが、小説を對象とした批

評文を、時評文を別にすれば書いたことは殆どありません。『ウェルテルは何故死んだか』といふ作品論がありますが、日本の現代作家の小説では、中河與一『天の夕顔』を論じた批評文があるくらいです。

それにくらべれば、詩論はたくさんあつて、『和泉式部私抄』、『後鳥羽院』、萩原朔太郎の『郷土望景詩』、『氷島』を論じた批評文などが力作です。とりわけ『萬葉集の精神』が最大の力作であります。

『萬葉集の精神』は昭和十七年に筑摩書房から刊行された五百七十一頁に及ぶ大冊である。これがどういふ性質の書物であるかを、ひとことと言ふことは不可能であるとしても、その最後の章「運命」の前後の作者の文章を引いて置く必要があるかと思ひます。

萬葉集の精神の成立といふ點でも、家持の精神の完成期の火花を感じさせる點でも、橘氏の大獄を中心とする時代への慷慨を、國ぶりの慟哭に歌ひあげたときに、もう萬葉集の精神は偉大なる敗北を了知した上に成立してゐたのである。我々は續紀の示す歴史とその文化を考へ、これに萬葉集の示す文化と歴史を對應して考へるとき、今日歴史と云ひ文化といふものの何であるかを了知する。萬葉集の精神は、描かれた範圍で云ふとき、湊川

に到らず櫻井驛垂訓で終つたものである。家持は最後に於て、わが道をうける子らに、永遠の祈願を映し、啼きつゝも希望にみちたことばを與へたのである。さうして、自己の傳へる精神のために、祈りの讃歌を以て集をどした。また、

この歴史の示す文化は、東大寺を中心とする國分寺文化であり、律令を中心とする文明開化文化である。これに對立する肇國固有の精神を、歴史として文化として示すのが、萬葉集であつた。萬葉集に於ては、あへて天皇信仰の思想を説かず、しかもその大君思想は末期に及んでいよく、皇國の草莽の、神の信仰の極致觀に到達するのに對し、書紀續紀は政治思想を説く文化財指導理論を持しつゝ、末期に及んでいよく、國體觀を固定化する。萬葉集の描いた大君思想は、つひに説明し難い深奥切實な永遠の生の原理となつたのである。

さらにまた、家持の晩年、萬葉集の終つてのちの運命は、極めて沈痛であつた。彼はこの期間に、大伴氏の氏上としての重きに任じつゝ、それだけの責任を身に負うてゐたのである。ある意味では、奈良時代の大きい動きは、大伴氏對

藤原氏の、重大な運命を賭した抗争の歴史とさへ云ひ得るであらう。さういふことのもつ思想的意味の振幅を考へて、我々は續紀文化に對し萬葉集の精神を理解するのである。我々は今や萬葉集を一つの古典的作品として見るのではなく、我々が明日に作るべき時代を思ひ、今日に生きることを思ふ上で萬葉集の中に、今の我らの唯一の臣道の思ひをこめて燃焼した古典を見るのである。

我々は今日に於て萬葉集の最後の讀者であるかも知れないと思はれる。明日はわれらの國の精神のたゞ偉大な日であるべきだからである。我々はこの古典を文藝學的分析の對象として考へない點で、今日の大體の國文學や萬葉調派や、精神動員派とは異なる古典論の態度を持ってきたのである。我々はさういふ形で、國の明日に必ず生れてくるものを思ひつゝ、萬葉集を分析し鑑賞する代りに、それが生れ出た創造の母胎をたづね、その作品を古の詩人の生々しい生命の現實にまで還元しようとする。これは今日と明日の詩を作る者の立場である。

かういふ文章は、今日の戦後民主主義といはれる時代の言論的雰囲気からみれば、ずぬぶん異質の、耳慣れない感じを抱かれるかもしれませんが、ひるがへつて大東亞戦争期の國民精神總動員といふ國策的言論の風潮の中に置いて

みるとき、きはめて獨自な、個性的な悲劇的聲調が印象づけられる文章であります。

『萬葉集の精神』は、戦争期の、日本に歸れ、古典に歸れといはれた風潮の中で書かれたものにちがひないが、さういふ風潮に便乗するどころか、激しい抵抗の精神につらぬかれてゐます。

私は當時、國民學校と呼ばれた小學校の最高學年に在籍してゐて、中學の受験準備をしてをりましたが、擔任の先生が毎日第一限の授業を萬葉集の講讀に當ててゐて、テクストは齋藤茂吉の『萬葉秀歌』でした。いふまでもなく、齋藤茂吉は「あらゝぎ」の指導的歌人でした。「あらゝぎ」はもともと一つの短歌結社にすぎませんが、結社員の數はきはめて多く、日本最大な短歌結社であり、のみならずその短歌文學運動は、文學のわくを超えて思想運動のやうなおもむきを呈してゐたといはれてゐます。したがつて「あらゝぎ」派の萬葉集解釋は、讀者に大きな影響をもつてゐました。

ただ、私どもは子供で、當時の文學的事情など何も知らず、『萬葉秀歌』によつてはじめて萬葉集を知り、柿本人麿や防人の歌を知りましたが、柿本人麿はまさに「神のごとし」で、とりつきにくく、防人と大伴家持の歌がよ

印象に残りました。

今日よりは顧みなくて大君の

醜の御楯と出で立つ吾は

今奉部與會布

この歌は當時、作曲されて國民歌謡としてひろく知られました。意味はあらためて解くまでもありません。「滅私奉公」といふ國策イデオロギイがびつたりする一首とだれもが思つたでせう。ところが戦後になつて、保田與次郎の著作を古本で求めて次から次へと讀んでみたとき、『日本語録』の中で、この歌はよい歌であるが、難解なところが二つある。それは「顧みなくて」と「しこの御楯」であると言つてゐるのにであつて驚いたことがある。

『顧みなくて』といふことは、なほ何かを顧みてゐる状態であつて、何を顧みたかといふと、父母妻子である。

これは防人の他の歌によつて明らかである。〈中略〉彼らが公と私とを、色々と考へ、私は軽く公は重いといふ理論で以て納得したのかといへば、防人の場合は、さうでなくして、そのまゝの状態を残しておいた。それを理窟の上で一を以て他を押さへることをせず、自然のまゝにしておいて出發するといふことを歌つてゐる。〈中略〉これを自然の情として、古來の國學者は十分に認めたの

である。

戦後になつて、反動が起つた。「滅私奉公」は否定され嘲笑され、私的原理が公的原理に優先するといふ考へ方が、通念として急速にひろがつた。しかしこれは價值觀の轉倒ではない。無條件降伏による敗戦の混亂に乗じた情勢論の轉換であります。

保田與重郎は書いてゐます。

この公と私を、あれかこれかと考へる原理は、或ひは文化と云はれるかもしれぬが、さういふもの考へ方は、決して次の高い段階へ人の考へを飛躍させる原理をうつにもつてゐるものではないのである。飛躍する原理は全然別のもので、思想としても異なつてゐるし、あれかこれかを考へてゐる時間には、さういふ原理は人の頭にないのである。

「かへりみなくて」といふのは自然の情であるから、自然に勇敢になつてゐる。しかし自然だから、幾度もくりかへし、くりかへす度に勇敢さを増す。

さて、さういふ意味で『しこ』とは何かと云へば、今日一般に『醜』の字をあて、身をへりくだつて『しこ』と云つたと云うてゐるのは當らぬのである。第一大君に身を比すといふことはあり得ぬことだからである。古人

はさういふ冒瀆的な考へ方をしなかつた。またさうした解釋では『かへりみなくて』と『しこの御楯』といふ意識の關係が創造的でなく極めて理性的になる。」

たしかに「しこ」といふ古語の原義に「醜い」といふ意味はありません。それは轉義であつて、防人の意識では、強い、勇猛果敢といふことになるでせう。

かういふ解釋は、保田與重郎の獨創といふよりは、獨創といつてもいいでせうが、江戸時代十八世紀の國學者の註釋から暗示されるころ大きかつたでせう。事實、保田與重郎はそのことを明言してゐます。契沖の『代匠記』、鹿持雅澄の『古義』が頼るべき文獻であり、明治文明開化以後の萬葉學を「あらゝぎ」派の萬葉學とくに齋藤茂吉を念頭に置いてゐたやうですが、それは次のやうな文章にあらはれてゐます。

「しかし何故かくも單純に彼らが近代の文藝學的思潮の考へ方を唯一の金科玉條としたかといふことは、たゞ彼らが古代の思想への自覺にかけてゐたといふだけの理由ではないと思ふ、むしろそのまへに大切な古代思想のなり立つた感覺への回想に於て、智識と着想と見識に缺けるものがあつたからであらう。しかしそれ以上の理由は、彼らが近代主義の感覺の中に自然(おのづから)に住んでゐなかつ

たからと思ふのである。かうしてこのことはその人々には考へも及ばぬ批判であらう。どのやうに言つても古代をいふ我々の方が、今のところでは最も尖鋭な近代と、又すでに頽廢する以外に厚生法の無い現代の皮相の尖端に、あきらかに曉通してゐるのである。」

この逆接的な自負が、保田與重郎の古典論につねにひそむ動機であることはみのがせません。あの戰爭期に保田與重郎の古典論が尖鋭な現代の批評文學たりえた理由でもあります。それはまた彼の萬葉集の主役が、柿本人麿でなく、大伴家持である理由でもあります。

『木丹木母集』といふ一冊の歌集があります。ここに收められてゐる長歌、短歌は、大阪高等學校在學時代の若年の作品から戦後に及ぶ長い期間のもので、全歌集といつてよいものです。そのなかから何首かをえらんで感想を申したいと思ひます。これを代表的な歌といふつもりはありませんが、保田與重郎の詩精神をうかがふことのできる作品と思ひます。

さざなみの志賀の山路の春にまよひ

一人ながめし花ざかりかな

十八歳の時の作品で、大阪高等學校の學生のときに詠ま

れたものである。何の註釋も必要でない、平明素朴な詠ひぶりである。大和櫻井に生まれ、少年のときから萬葉集の歌枕をたづね歩くのが自然な遊びであつたやうな環境をいとはしむ心が、青春ののびやかな想ひに融け込んでゐる。保田與重郎自身が氣に入つてゐたやうで、人に乞はれて色紙に書いたといふ。

山百合のつぼみひらかんとしてゆれはじむ

あはれなるものを夜半に見るかな

この歌にはかなり長い詞書がある。これがないと一首の思想を歌に盛ることは無理であると考えたのであらう。

宵のうちにはなほかたかりしやま百合のつぼみの、夜半となりて咲くけはひ、つよき匂ひ、部屋うつにひろがり、蕾のさきわづかにひらきつゝ、かすかに動くほどに、小さき圓を系がきて廻り始めたり。色もかたちも、つゆけく濡れて、いきものなまましき、あやしくなまめくものよと、夜半のつれづれにながむ。吉野山にて晝の酒くみつゝ見まもりし、山櫻の開花は、その間三六分時にたらず、咲くやはやくも凋落をはじむ。山百合の開花は、その位置を定めてのち、もはや動くことなし。花びらのびて開きをはるまで、ほゞ三十分間。その始終を眺めて、昔道元禪師の、八萬四千の境界縁と申されしを、ふと思ひ

出しぬ。

山百合の蕾から開花にいたるまでの自然のメトードに、「あはれなるもの」といふ最大の讚辭と感嘆の念を呈した、かういふ感性の在りやうは、ゲーテが自然の觀察によつて「原現象」(ウルフェーメン)と呼ぶ絶對の存在を實感したのを思ひださせます。當時、ヘーゲルと交際のあつたゲーテは、ヘーゲルが「原現象」を觀念的な「抽象」と呼んだのにたいして、辨證法といふのは、濫用されると、白を黒と言ひくるめる「辨證法病者」(デイクレテリツシエ・クランケ)を生むとやりかへしたといひます。

ともかく、この一首は、生涯、自然への信を失はなかつた保田與重郎の感受性の原型を、あはれなるものを見たといふ感動によつて示してゐると思ひます。

景仰歌 三首

國のため、いのち幸くと願ひたる、

畏きひとや。國のために、死にたまひけり。

わがこゝろなほもすべなしをさな貌

まなかひに顯つをいかにかもせむ

夜半すぎて雨はひさめにふりしきり

み祖の神のすさび泣くがに

「右三首、昭和四十五年十一月某日。」といふ簡単な詞書
きがあり、三島由紀夫の自決への追悼の歌であることがわ
かります。しかし、三島由紀夫の名前は出てきません。い
はゆる三島事件と呼ばれたあの事件をほのめかすやうな言
辭もありません。

保田與重郎の歌についての信念はこの歌集の後記の中に
みられます。

歌に對する私の思ひは、右の人の心をしたひ、なつか
しみ、古心にたちかへりたいと願ふものである。方今の
ものごとのことわりを云ひ、時務を語るために歌を作る
のではない。永劫のなげきに貫かれた歌の世界といふも
のが、我今生にもあることを知つたからである。現在の
流轉の論理を表現するために、私は歌を醜くしたり、傷
けるやうなことをしない。さういふ世俗は私とは無縁の
ものである。

したがつて、三島由紀夫だけでなく、一切の知友に關す
る歌でも、人一倍子への愛情の深かつたこの人の、失はれ
た子にかかはる歌でも、そのなまへを明かしません。世俗
の文士である私の以下の文壇世俗の論理にかかはる言舉げ

は、不要の言説として聞き流してくださつてかまひません。

三島由紀夫は、戦争中に、たつた一度だけ保田與重郎を
訪ねて、失望して歸つたと、戦後に書いておます。しかし、
これは事實に反します。三島由紀夫は學習院高等科の級友
と何度も東京の落合にあつた保田宅を訪ねて、祝詞の解釋
などを聽いておます。三島由紀夫はこのことを隠したかつ
たのでせう。戦後文壇から生き埋めに等しい不遇を受けて
ゐた日本浪漫派の代表的な文學者とは遠ざかつてゐたかつ
たのでせう。

あさはかな文壇處生智と非難するつもりはありません
が、さういふ事情、いきさつを保田與重郎はだれよりも知
つてゐた筈ですが、一言も洩らしたことはなく、右の追悼
歌ではひたすら、「わがこゝろなほもすべなしをさな貌ま
なかひに顯つ」と歎き悲しんでおます。記憶の中にあるの
は、「をさな貌」した學習院高等科學生のあをじろい神經
質な顔で、ボディビルで鍛へた不敵な文士の面貌ではな
かつたのです。

保田與重郎はさういふ人でした。戦後の三島由紀夫の小
説作品はおほむね認めなかつたやうですが、あの市が谷臺
での三島の最後の行動にはつよく打たれたことは、「時雨
の記」といふ文章にも切々と述べられておます。

山かげを立ちのぼりゆくゆふ烟

わが日の本のくらしなりけり

けふもまたかくて昔となりぬらむ

わが山河よしづみけるかも

この歌の後に、「右、『天杖記』昭和十八年作」とあり、年代が明記されてゐます。

私は、保田與重郎が亡くなるおよそ一ヶ月まへのある日の午後、日本橋の東急百貨店で棟方志功歿後の板畫展を観た。昭和五十六年九月のことであります。展示の中に、保田與重郎の歌を主題にした比較的小品の板畫が數點竝んでゐて、眼を惹かれました。深い青と匂ふやうなきれなみの色彩の絢爛たる背景に刻まれたそれらの歌の調べが胸にしみました。そこにはまた、次のやうな歌も刻まれてゐました。

見しままに國原かはらず足らひたり

しづごころなく泪あふれつ

私は展覽會場で、右に引いた三首のうち、はじめの二首とあとの一首を、時期のうへであべこべに受けとつて、家に歸つて、『木丹木母集』をひらいて、その錯覺に氣がつ

いたのですが、このことは、戰爭中と敗戦後における保田與重郎の思想の孤獨についてあらためて考へさせるものがありました。

保田與重郎は、戰爭中も、敗戦後も孤獨であり、この時代の激變において、自分の思想を變更することも修正することもなかつたごく少數の日本人の一人でありました。なるほど、戰爭に勝たうが負けようが、日本の天地山河はかはずに在る、といふのであれば、それは昭和二十年八月十五日の正午といふ時點における實感として貴重なものでありました。しかし、さういふ限定をはずすと、やや粗放な正論に過ぎないとも言へます。

永遠の日本の暮らしへの祈りが、とくに第一首の歌に感じられます。しかし第二首目になると、感情はやや複雑になり、思想性を持つてくる。「けふもまたかくて昔となりぬらむ」といふのは、永遠の今といふ瞬間が聯想されます。「永遠の今」といふのは、この頃、西田幾多郎の思索的主題でした。保田與重郎は西田哲學にアンビバレンツな氣持を抱いてゐたやうです。ヨオロッパの觀念論哲學の概念で日本哲學を創造しようとする惡戰苦闘を認めながら、いいことを言うてゐるが、その思想は寂しいものである、といふやうなことを言つてをります。西田幾太郎の方から保田

與重郎に言及したことはありません。同時代の人間のあひだで、その距離が遠くないのに理解が届かない一例かと思ひます。

ところで、右の歌は、永遠の今をいひながら、同時に「わが山河よしづみけるかも」と終末感がひびいてきます。大東亞戦争の最終段階に何と考へてゐたかを思ひ出すと、もはや物量の消耗戦では彼我の懸隔は絶望的であり、生産力にもとづく合理主義の判断からは敗戦しか出てこない。しかし、戦争指導をする國家の國策理念として、悠久の大義とか天佑神助といふ言葉が言はれてゐました。

保田與重郎に『神助説』といふ文章があつて、昭和十九年に書かれたものです。むろん、合理主義に立つ者は、かういふ言説、概念を神憑りと呼んでゐました。それは必勝の盲信を嘲笑する悲觀論に過ぎないので、傍觀者の立場からの情勢論です。保田はかういふ世相を喜ばなかつたので、むろん悲觀論に組みませんが、「神を念ずる者も、論の上では人力の眞を盡すべき」であると考へて、「神助説」をひそかに遺書のつもりで書いたのです。

封建的軍隊の闘争に於ては、所謂必勝の盲信と、それによる盲進もあるであらう。しかしわが善良な國民のもつ必勝不敗の信念の實相は、國民各位が、國史的國民生

活の最後の一线に於てあくまで戦ふといふところであり、これは國土が銃後なる時にも戦争の根柢であるが、こゝに國土戰場化を豫想した、緊急時に於ても必勝の信念の現實である。しかもその場合には、玉碎と特攻といふ二つの今日の原理が、またその必勝信念の根基であつた。そこには倫理の安心と日常の自由が生まれる。この信念の主張はさういふことはあり得ないといふ論者に對抗する必要はないのである。

保田與重郎の戦争期の最後の行爲は、この信念を生きたといふことで、昭和十九年秋の重患の肺炎からやうやく豫後を得たときに召集令状を受け、當時、その言論が陸軍情報局から好ましからざる者とにらまれて自宅に憲兵の監視がついてゐた。その憲兵から、東海道線は空爆のためにダイヤが亂れてゐたこともあり、行かなくてもいいのではないかと好意の助言があつたのに振り切つて、大阪の部隊に入りました。三十五歳の老兵、しかも文弱の徒が、氣息奄々の状態で北九州の港を出發、朝鮮半島を經由して北支へ派遣されました。

老兵加ふるに病中の疲勞、身體は困憊こんぱいの極にゐたのである。生きて大陸に到着することを思ふ暇さへ無い有様で、うつゝのあはひに身を抑へるやうに保つてゐると、

數日前應召地の宿舍を出る時、焼野原となつた路傍に坐して、我々を合掌して見送つてゐた老婆の姿が、目交まなかから消えない。そんな状態で、ともすれば自らくづれをれさうな心身の衰へを、懸命にこらへることが、極めて自然になつてゐたのであつた。」（『みやらびあはれ』）

『みやらびあはれ』は昭和二十二年に執筆された。戦後になつて一等早い時期に書かれた文章で、二十年の應召の時から、北支石門に派遣され、その陸軍病院で敗戦を迎へ、翌二十一年に復員して、郷里櫻井に歸る、その間の回想と、占領下日本の精神状態を、自分の置かれた文壇的生き埋めの状態から、しかもその状態の事柄としての詳細や憤怒やらを一切述べずに、もつぱらわが心を描いて時務にかかはることを述べない、藝術的な文章であります。

今の主題に引きつけて言へば、歌にたいする保田與重郎の思ひと同じ思ひによつて書かれた文章といへるでせう。「永劫のなげきに貫かれた」文章の世界、「現在の流轉の論理を表現するために、醜くしたり、傷けるやうなことをしない」さういふ文章であります。

このとき、保田與重郎に必要なつたのは、小説でも文藝評論でも文明批評でもない、廣義の詩と文章でした。

ついでながら、敗戦直後の文壇に新しくあらはれたのは、第一次戦後文學といはれた、戦前マルクス主義運動からの轉向左翼者による小説と文藝批評でした。

不思議なことに、戦後文學はあらはれたのに、敗戦文學はあらはれませんでした。敗戦の悲しみと歎きを表現の根柢にもつ文學は、太宰治や川端康成によつて書かれましたが、GHQの檢閲によつて肝腎なところが削除され、削除の痕跡も残さぬやうに抹殺されました。

保田與重郎は、何も書かなくてもGHQからすれば要注意人物でした。もとよりGHQの要人らは何も知りません。彼らは太平洋戦争史觀と東京裁判史觀のイデオロギイを奉じてゐるだけであり、だれが戦争犯罪人に該當するか、追放にすべきかを、日本人が具申するのを待つてゐました。具申する人材には事缺かなかつたやうで、コミンテルンの三十二年テエゼをあひかはらざる信奉する左翼知識人や或る種のキリスト教信者が、追放者のリスト作製に協力しました。協力しないまでも、聞くに堪へない中傷、罵倒の文章を公の刊行物に發表する自由をだれも妨げません。

むしろ、保田與重郎はそれを知つてゐて、反論も言ひわけもせず、沈黙を通しました。

言ひ譯けに始まり、言ひ譯けに終る近ごろの人の考へ

や言論といふものに、私は歸國當時こそ、悲しみと恥しさと憎しみをしきりと味つたが、それらがおのづから憤りに變るまへに、今は却つて自身の負目となつた。」

（「みやらびあはれ」）

三年前、戦争末期の切迫した時局の中で、必勝不敗の信念を抱き、その信念の根據を語つた『神助説』にたいして、さういふことはありえないといふ論者に、「對抗する必要はないのである。何となればかゝる論者は國史的國民生活の信を抛棄した人々だからである」といつたが、いまの敗戦占領下での沈黙は、動機はおなじものでありつつ、状況は絶望的に悪いのである。そこで保田與重郎は、沈黙しつつ、さういふ絶望的な言論状況を、「自身の負目」として背負ふ決意をしておます。

この悲痛な決意が『みやらびあはれ』の發想法になつてをります。いつたい何が起つたといふのでせうか。

歸つてきた去年の夏、私はふとある老作家の戦時中の日記をよみ始めて、八月十五日の夜平和恢復の喜びを祝ふ酒をくむ條に到り、つひにその續きを讀み續けるに耐へなかつた。忽ち私は悲しいことを思ひ始めたのである。なまへを擧げておませんが、老作家とは永井荷風のことであります。戦時中に萬葉集が一邊倒のやうにかつがれた

時局文化風俗にたいし、萬葉集がわかるためにも永井荷風が讀まれなければならぬと考へもし、言ひもした尊敬すべ老作家です。日本教養者階層の趣味（この言葉を保田與重郎はやや古風に使ひます）の水準を保守する存在でした。さすがに荷風は、昭和二十年八月十五日に始まる敗戦占領を終戦などと言はず、「休戦」と呼ぶ見識を持つてゐました。その荷風が、「斷腸亭日乗」の八月十五日の記事に、頂戴物のワインで祝杯を擧げてゐることを無邪氣に（一）記してゐます。このとき保田與重郎は地獄を見たのかもかもしれません。これは二度目の地獄で、一度目は、北支石門の陸軍病院の病室で、部屋の中央の花瓶の向日葵の大きい花が、床に描いた黒々とした影に「無限に深い闇」をみたときです。二度目が、昭和二十年八月十五日の夜です。

以下、戦後の歌をいくつか引用して拙い話ををはらせたと思ひます。

はらわたを斷つてふことをまつぶさに

知りし日なりきさながらおぼゆ

うつそみを音たてゝ流るゝ涙川

かなしきことを知りけるかも

朝明けのくれなゐの空けふありて

また夕やけのくれなゐの空

あたゝかきひるなりしかどわがこゝろ

さだめかねつも行方も知らず

ぬかるみをふみゆくむれの闇の音

年たつ夜半の天地の音

夢さめてうつゝの花のすまじさ

なになにに流せし涙なりけむ

秋といふは眼にしるきかな青旗の

葛城山の雲みだる時

古りし人の歌つぶやきてよむならひ

いつつきにけむ老といふものに

封建の國守こゝにて老いにけむ

寢ての朝開あさひの蓮池の花

最後の一首は『木丹木母集』に収録されてをりません。

(をけたにひであき 文藝評論家、東洋大學名譽教授)

杏

藍川由美隨聞録

山田 弘

(一)

五月七日、日本俱樂部で藍川由美先生の「日本語と日本のおと」といふ講演を拜聴しました。

有名な歌手ですので、恐い方かと思つてみました。

しかし、登壇なさつた御姿を拜すると、洵に優しげで、母性豊かな女性と御見受けしました。

いざ講演が始まりますと、今度は、日本の音楽教育と國語教育を俎上に乗せて、容赦ない舌鋒を揮はれたのに、また驚かされました。

(二)

冒頭、「荒城の月」を題材に、藍川氏は音楽教育と國語教育の失敗が、相乗効果を發揮して、文化を破壊してゐる事實を指摘します。

たとへば、「松に歌ふはただ嵐」の「歌ふ」は「ウタウ」なのか「ウトウ」なのかがはつきり決まつてゐないために、人によつて違ふ歌ひ方をしてゐることを憂慮するのです。

もちろん、氏は單に畫一的に統制せよと言つてゐるのではありません。

「歌ふ」が「ウタウ」なのか「ウトウ」なのかは、各人の自由に任せてよいが、樂譜として呈示する場合には、いづれかに決めるべきだといふ御説なのです。

「誰」は「たれ」であるのか、「だれ」であるのかについても、同斷だとおつしやいます。國民共通の財産である唱歌は、みんなが同じやうに歌ふ必要があるといふわけです。

(三)

私の印象を申しますと（深読みし過ぎたのかも知れませんが）、文語の場合は「ウトウ」、口語なら「ウタウ」がよいだらうと主張なさつてゐるやうに聞えました。

最近、國語教師が、古文でも、「與ふ」「加ふ」を「アタウ」「クワウ」と讀んでゐます。もちろん、「アトウ」「クオウ」でなければいけません。これを、私は常々苦々しく思つてをりましたので、心中溜飲の下る思ひでありました。「誰」についても、歌の歌詞としても、口語なら「だれ」、文語なら「たれ」といふのが、藍川氏の御意見であるやうに察せられます。

(四)

もつと我が意を得たり、と思つたのは、「お馬の親子」

の「お馬」は「オウマ」でなく、「オンマ」であるとの御意見でした。

中國語では、「馬」は ma、「梅」は mei（現代北京語）と發音します。

日本語の「ウマ」「ウメ」は、この音が轉じたものだと
いふ説が有力です。

だから、もともと、「マー」「メイ」だったです。それが日本人には發音しにくかつたので、ヨを重ねて、mma、mmeと發音しました。

假名で書けば「ンマ」「ンメ」ですが、日本語には「ン」で始まる語は存在しませんから、意識としては「ウマ」「ウメ」と受取り、そのうちに、本當にさう發音するやうになつてしまつたといふ次第なのです。

そこで、藍川氏のやうな、言語感覺の鋭い人は、「オンマ」が正しく、「オウマ」ではない、と感覺的に受け止めるのです。

ところが、生半可な言文一致を弄ぶ人々には、この微妙な味はひが理解できません。

そして、その原因は、國語を愛さないこと、ひいては日本文化を愛さないところから來てゐると言つても、過言ではありませんまい。

(五)

それにしても、藍川氏は、子供の頃に、音樂の教師が「オウマ」と強ひて歌はせるのに不満を抱いて、「さうぢやない。絶対にオンマだ」と憤慨したさうです。

幼くていらした頃からの天才振りを彷彿とさせますが、それにしても、この教師の心なさには胸が痛みます。

國語、英語の學者や教師の中にも、「母音」を「ポイン」と讀んではいけない。「ボ+オン」なのだから、「ポオン」だと主張する愚にもつかない人々がゐます。

進歩的な教師達は、戦後の皮相な合理主義に固つてゐます。「お馬」も、「オ+ウマ」だから「オウマ」に決つてゐると思ふのでせう。言語の論理を理解せずに言語を教へてゐるのですから、その罪は萬死に償ひます。

私も元教師ですから、敢へて言つてしまひますが、日本の教師は全體に質が低すぎます。イデオロギーに凝り固まつて、思ひ込んだことを、恫喝的に生徒に吹き込まうとする人々を何とかすることはできないものでせうか。

(六)

「春の小川」は、戦後生れの我々は「春の小川はさらさら行くよ」と習つてをりますが、もともとは「さらさら流る」でした。それを、『流る』は文語だから、小學生には

理解できるはずがない」といふ文部省の淺智慧で、改惡したのです。「流れる」では字餘りになつてしまふから、「行くよ」にしたといふお粗末な話です。

これに關聯して、藍川氏は、昭和天皇が金田一春彦氏に引見を賜つたときの逸話を披露してくださいました。

先帝陛下は、金田一氏に向つて、「小川はどこへ行つてしまつたのでせうか」と敕問を下されたとのことです。

先帝の御人柄から考へて、表音主義の首魁に皮肉を仰せられたとは考へにくいのですが、あるいは軽く揶揄なされたのかも知れません。

藍川氏のおつしやるやうに、「さらさら行くよ」では、小川が水路を變へて、見えなくなつてしまつたと考へたくなりません。

(七)

それにしても、「流る」を「行くよ」に變へてしまつたのは、當然、戦後の混亂期のことであつたと察せられさうなのですが、實は、敗戦前の昭和十七年のことであつたと聞いて愕然としたものでした。

戦前から表音主義者はかなりの勢ひを持つておりました。戦後、その連中が占領軍の虎の威を借りて、日本文化破壊の兇行に及んだのが、「現代假名遣」であり、「當用漢字」

でありました。戦後俄かに思ひ立つたのではなく、前々から虎視眈々と機會を覗ひ、網を張つてゐたテロリストグループの計畫的犯行であつたことを忘れてはなりません。

(八)

一番感銘を受けたのは、次の歌に關聯しての話でした。

さぎりきゆる、みなとえの

ふねにしろし、朝の霜

ただ水鳥の、聲はして

いまだ覺めず、岸の家

「みなとえ」「こ系(聲)」「いへ(家)」と、現代語では「エ」になる音が三箇所出て來ます。

「え」は「ヤ行」、「こ系」の「系」は「ワ行」、「いへ」の「へ」は「ハ行」です。もちろん、昔の日本語では、それぞれ別の發音でした。

藍川氏は、この三つの「エ」を發音し分けていらつしやるといふのです。實際の發音を聞かせていただきましたが、それをここで文字に表記するのは難しいことですから、割愛します。しかし、簡単にいへば(藍川氏には、「そんなつもりではない」と叱られるかも知れませんが)、「え」「系」「へ」は、それぞれ、*e* の前に、*u* *u* の音を軽く入れるといふやうに心がけてをられるとのことでした。

つまり、「みなとえ」の「え」は ye (イエ)、^ニ「ゑ」は we (ウエ)、「へ」は he を意識した音にしてゐるやうです。發音が變つても、歴史的假名遣が表記するもともとの音は、日本人の心の中に、潜在意識として残つてゐるといふことなのでせう。

ここで、私が思ひ出したのは、戦後建國したイスラエルが、古代ヘブライ語を國語として復活させたことです。相當な修正は加はつてゐるやうですが、日本人が萬葉の言葉を目常語として復活させるやうなものであり、言語史上の奇蹟といふことができるでせう。

進歩的な人々は、古い言語を排斥しますが、それがどんなに淺薄な思想であるかを藍川氏は宣教師のやうに説くのです。

發音にしても、單語にしても、我々はもつと、古い言語に馴染を持つことが必要なのではないでせうか。

日本の音樂教育を明治以前に戻せ、と氏は訴へます。

音樂教育ばかりでなく、日本の教育全般の現状を、正確な分析をもとにして、心底憂へてゐるのです。

(九)

また、「めだかの學校」についてのお話も興味深いものがありました。

「誰が生徒か先生か」の「生徒」「先生」を、最近の教師達は「セイト」「センセイ」と教へてゐるさうです。

さうではない、と藍川氏は力説されます。

勿論、「セイト」「センセイ」と「イ」をしつかり發音しなければならぬといふことです。

本來は「セイト」「センセイ」だつたものが、いはば崩れた音に墮落して、「セイト」「センセイ」に變つて來たのです。

日常の會話では「セイト」「センセイ」になつてしまひました。いや、正確には、「イ」と「エ」の中間音になつてゐます。このやうな場合、歌の歌詞は中間音には出來ません。また、特に唱歌の場合は、子供に正しい日本語を教へるといふ役割をも擔つてゐるのですから、^{すべから}須く保守的であるべきだ。安易に流れた、怠惰な發音を教へてはいけません、といふのが、藍川氏の持論だつたのです。

(十)

進歩的な文部官僚や教師たちの主導のもとに、日本の教育はどんどん頽廢して行きます。

音樂を「國の基本」と定義し、「國樂」といふ用語を使ふ藍川氏は、この現状の改革に献身なさつてゐます。

「日本人は劣等民族」とまで仰せられたのには、反撥を

感じた人もみたやうですが、日本を憂へればこそその御言葉であり、この憂國の志の前には、片言隻語を取上げて批判する人こそ責められるべきではないでせうか。

終戦後、世紀の變り目に至るまでは、子供を甘やかせる教育が流行し、「近頃の子供は勉強勉強でかはいさうだ」などと機嫌を取るのが流行してゐました。それが、「ゆとりの教育」が失敗し、世界各国に比べて生徒の理數系の實力が劣つてゐることが明らかになると、俄かに「學力低下」が叫ばれる世の中になりました。

こんな右顧左眄する輿論を見てゐると、私も本當に「日本人は劣等民族だ」と口にしたくなるのです。

(十一)

講演の中の、次のやうに始まる、音樂の起源についてのお話も、胸を打つものがありました。

大和琴といふのは、天皇の樂器と言はれてゐまして、それはなぜかと言ひますと、何かのときに、言葉で神様にいふのではなく、ポロロンと天皇が鳴らして、何かの御託宣を戴く……。

ここは事實關係を述べていらつしやるだけであるにせよ、音樂の起源は、神に語りかけることにあつた、と氏は思つてをられるのでせう。

私が聯想したのは、最近のキリスト教會で、戦前から使はれてゐた、文語の祈禱文をみな口語に變へてしまつたといふ悲惨な事實です。

前述の「春の小川」の事例と同じやうに、教會は、文語では信徒が理解できまいと馬鹿にしてゐます。

しかし、自づから音樂的な響きを持つ文語は、散文であつても、韻文の性格を持つてゐるのです。

聖母に捧げる文語の「天使祝詞」は「めでたし、聖寵滿ち満てるマリヤ」で始まり、「罪人なる我らの爲に、今も臨終のときも祈りたまへ」で終ります。

これを「私たちのために祈つてください」と言ひ換へて、何が嬉しいのでせう。

口語の生々しい響きには、祈りながら氣恥かしさを覺えてしまひます。

それを、ワンクツション置いて、日常語から乖離させた文語祈禱文の詩的效果は、唱へる者を嚴かな氣持にさせるのです。

しかるに、「形式などはどうでもいい」といふ進歩主義に毒されて、日常語で聖母に、いはばタメ口で語りかける現代の聖職者や信徒のおぞましさに、私は胸が悪くなるのです。

聖母の御前に花束が置いてあるのをよく見かけます。これも、進歩的な人々から見れば、形式的なものだから必要がない。面倒だから造花ですませればよい、といふことになるのでせうか。

「そんなことはない」と言ふでせう。

それなら、造花と大差ないタメ口の口語祈禱文は廢して、きちんとした敬語であり、詩であり、音楽であり、花束である文語に戻すべきではないでせうか。

藍川氏の講演から得る所は實に大きなものがありました。

これを機に、文化といふものを考へなほしてみたいと思ひます。

(やまだ ひろし 本會會員)

(藍川由美〔あみかはゆみ〕氏は、聲樂家、學術〔音樂〕博士)

花

國語問題の變化と變質

若井勲夫

(一) 言葉の知識・教養の衰退

① 語法のゆるみ・亂れ

語法や文法は先に規則としてあるのではなく、現象や用法を整理し、そこに一定のきまりを見出したものである。だからと言つて、語法からはづれた使ひ方をすべて認めて、若者の新しい感覺として擁護することは誤つてゐる。例へば、「食べられる、出られる」を「食べれる、出れる」と言ふのは四十年以上も前から見られ、一部の地域では方言として使つてゐる。近世からの「讀める、行ける」の可能動詞の類推でもあり、將來を先取りして、この「ら抜き言葉」に迎合して、指導もせず流行を追認する態度は無責任である。一番の「問題點は、このア母音の「ら」を抜くことにより、エ母音が二回續き、だらしなく弛緩した、投げやりで締りのない音感を伴ふことである。これに氣付かせて、美しい國語に立ち返らせねばならない。

また、「休ませていただきます」を「休ませせて」と、「見させて」に類推し、無用な「さ」と入れる誤用が目立つ。「させていただく」と言へば何となく丁寧な氣分になり、どの

語にも付けられると勘違ひする。語法、文法の知識が正しく教へられず、言語感覺が衰へてきてゐるのである。

② 敬語の誤り

敬語は國語にとつて大切であるが、使ひ方が難しいことは多くの人が實感してゐる。特に、「受付で伺つて下さい」「先生がお話しされたやうに」と、尊敬語で言ふべきところに、謙讓語を誤つて使ふ人が多い。これは話し手のへり下りの言葉を相手にも使ふと何となく敬意が漂ふと思ふからか。尊敬語はまだ分りやすいが、「おつしやる、御覽になる」のやうな單獨語が忘れられ、簡単な「れる、られる」で済ませることが多くなつた。

「お客様が申された」は謙讓の「申す」が畏つて、勿體ぶつた意識で、丁寧語のやうに受け止められ、「れ」の尊敬で敬意を示すと誤解したのであらう。丁寧の「です、ます」は文體が異なり、使ひやすく、これで敬語を使つた氣分になり、それ以上の敬意表現に思ひ至らない。

③ 慣用句の誤解・不使用

文化廳が毎年行つてゐる「國語に関する世論調査」によると、慣用句の意味を誤る人が年々多くなつてゐる。例へ

ば、「情けは人のためならず」は半數、「流れに棹さず」「役不足」は六割以上が誤解し、「怒り心頭に發する」ではなく「達する」と七割以上が誤用する。この第一の問題點は、これらの慣用句、成句を使ふことが少なくなつたことである。使はないから意味も分らず、消えていく。これは國民の言葉の知識や語彙の量が少なくなり、言葉の關心や教養が衰へてゐることを示す。誰もが知つてゐた一般常識がなくなり、上部だけの内容の薄い表現しかできなくなつてゐる。言葉が實用的な手段に墮し、表現の綾や意識まで考へない。

④ 讀書時間・辭書使用の減少

學生が讀書に費やす時間や量が年々減つてゐることは各種の調査によつて明らかである。小中學校で讀書に力を入れても、生活の習慣として定着しない。讀書がすべてではなく、それ以外に興味が廣がることもある。また、インターネットの普及により一人で活字を追つて地道に讀んでいかうとする積極的な姿勢が乏しくなつた。知識が斷片的、一時的になり、消費され流されてゐる。辭書もページを繰つて語句を求めていく努力は嫌がられ、電子辭書やケータイで簡単に代用され、意味の置換へで終る。

讀書や辭書が縁遠くなるのに對し、音楽や情報機器で新しい若者の教養ができてゐると考へることもできる。しかし、情報は實質的な中身の濃い教養となつて人間形成に資してゐるだらうか。淺薄で暇つぶしに終り、蓄積されてゐないのではないか。

⑤ 古典教育の不振

高校の古典教育が年々やりにくくなつてゐるらしい。生徒の古典への關心と熱意が低下し、學力が下つてゐるといはれる。現代文の授業でも、言語表現に密着して内容を理解するより、自分がかう思つたと、感想の言ひ合ひに止ることが多いといふ。これは言葉が傳達技術を中心とした實用的な手段と解され、思考し認識する力を鍛へることを怠つてゐるからである。文語文法や古文單語を覺える努力を輕んじ、文語の表現も教へられず、歴史的な知識を缺いてはますます古典は遠い世界になつていく。

このことは、英語教育にも言へることで、基礎的體系的な文法を學ばず、會話中心の教材が多くなつた。従つて、英文の讀解力や英作文の力が低下してきた。發音や會話は確かに前代よりは上達してゐるが、それは表面的、手段的なものに過ぎない。日常會話ができて、中身のある思想

を表すことはできない。

以上に述べてきたことは國語教育の變容、變質に關はつてゐる。學習指導要領で國語科の目標として從來の表現力、理解力の育成に加へて、平成十一年に「傳え合う力を高める」ことが入れられた。「生きる力」の大目標の一環であり、教育自體が變りつつある。

⑥女性語の衰退・不使用

前代からの傳統的な女性特有の表現が年々少なくなり、男性語に近づき、同時に、粗野、亂暴、輕薄になつてゐる。これは社會通念、社會構造の變化に沿つたものであり、また、さういふ言葉を使ふ女性の内面の在り方が變化してゐることを示す。男女の區別が縮まることの影響がどうなるか豫斷を許さない。

⑦人名のつけ方の變質

昭和の終りごろから子供の名づけ方が變つてきた。平成二十一年に生れた子、四萬人の名前を見ると（ベネッセ調べ）、一定の傾向が分る。漢字では男は「翔、悠、太」、女は「美、結、菜」、語末の音では男は「と、た」、女は「な、

い」が多い。讀みは、「大翔」は「ひろと」の他に前年は「はると、やまと」、「陽菜」は「ひな」の他に、前年は「はるな、はな」と多彩である。これを從來の命名法と比べると、國民の言語意識に何か大きな變動を來たしてゐるのではないか。漢字の表意性を前提としてゐても、共通の常識として意味（訓よみ）を考へずに、無理に擴大して、個人の趣味や感情で、名づける。音感と文字感のイメージが先行して、言葉としての存在感がない。ただ元氣で明るく、易しくかはいといふ印象と雰囲気だけである。「結愛、結菜、結衣」が「ゆあ、ゆな、ゆい」、「美羽、美優」が「みう、みゆ」など、言葉たる名前の實質を缺き、言葉として成り立たない。名前がまるで感覺的な符牒となり、その人となりを表さず、生きていく姿勢も精神も弱々しい。かうした流行は五十年を経て、言葉の内面、本質を支へる教養が弱體化したことを示す。言葉は思考そのものであり、人間を形成する根本であることを見失つてゐる。

⑧地名のつけ方の變質

平成の大合併の前から前代まで思ひつかなかつた珍妙な市町名が表れてゐた。つるが市、さいたま市などの古い地名の平假名、さくら市、みどり市、あさぎり町などの普通

名詞の平假名、南アルプス市の外國地名、伊豆の國市、隱岐の島市の「の」の表示、奥州市、さぬき市、四國中央市などの廣域地名など、人名と同じく、地名の發想と意義が全く變つてしまつた。

地名はその土地の歴史、文化に根ざし、長年の傳統の基礎があることが教養であつた。しかし、昨今はさうした考證を経ずに、安易に公募をし、協議する會の獨斷で決めることが多くなつた。漢字による語としての安定と定着を考へずに、柔らかい平假名の感覺が重視され、子供向けとなつてゐる。その地の獨自性、自主性に乏しく、どこでも通用する一般化が廣められ、普通名詞が固有名詞になつた。このやうに根據なく浮遊する名前がそのまま今の世である。

(3) 言葉の曖昧化と記號化

① マニュアル語(コンビニ・ファミレス・バイト用語)

既に多方面から指摘され、最近では反省、改善もみられるが、奇妙な言葉の使ひ方が増えてきた。これはコンビニやファミレスでバイトの若者がマニュアル通りに使ふやうに指示されてゐる。「千圓からお預りします」「お會計のはう、一萬圓になります」「こちらコーヒーになります」「以上の

注文でよろしかつたでせうか」などである。これらは遠回して間接的、曖昧でぼかした表現で、現代人の人との接し方、人間關係の取り方が反映してゐる。「千圓を」「お會計」「です(でございます)」とはつきり言ひ切らずに、相手との間に何か距離を置き、穩やかな表現と勘違ひしてゐる。「よろしかつた」は完了ではなく、確認の意味で、相手に確かめさせ、逆に責任を負はせた。失禮で強い言ひ方である。

この發想は廣く世間に及び、「今から會を開きたいと思ひます」「お聞きしたいと思ひます」と、無意味な「思ひます」を加へて、緩衝的な柔らかさを出さうとする。持つて回つた卑屈な言ひ方である。「お聞き(いた)します」となぜ直接に客觀的に言へなくなつたのか。また、「お詫び(感謝)いたします」と心から明確に表せない弱い感情を含んでゐる。

パソコンやインターネット、ケータイなどの情報機器が流行し、人間どうしが相向つて話をする機會が減り、直接的なつきあひが崩れつつある。公や知らない世界に入るより、個の世界に引き籠り、共同體への意識や態度が薄くなつてきた。このやうな生き方の變化が言葉の使ひを侵してゐるのである。

もう一つの言葉の變化は敬語のやうで敬語でない用法が目立つてきたことである。右のマニユアル語もその一つであるが、他に例へばコンビニヤスパーで日々使はれる「こんにちは、いらつしやいませ」「またどうぞおこしくださいませ」である。店員は客の顔も見ず、横を向いても言つてゐる。言葉に心が籠らず、外形だけである。目の前の人と向き合ふことなく、ケータイに向つてゐるやうに、浅い言葉だけが飛び交ふ。

また、「ここに御住所を書いてもらつてよろしいですか」「お名前を頂戴していいでせうか」など、「お書き（お教へ）ください」と直接に言はずに、「回りくどく、おどおどしてまるで許可を得てお願ひ盡してゐる印象を與へる。これはやはり一種の曖昧表現、ぼかし表現であるが、「すみませんが」「悪いけど」「恐れ入りますが」などのやうに、相手や場面に氣配りした「敬意表現」とも異なる。「お手數をお掛けしました」に對して「いいえ（そんなことはありません）」と問ひに對して正面から答へるのではなく、「大丈夫です」と、私的な個人の領域で答へる態度も表れてきた。言葉の應答によつて心を共にするのではなく、相手から一歩離れて防御する姿勢である。

國語問題五十年の現在、言葉に基く國民共通の精神の在

り方が搖ぎ續けてゐるといへよう。

②若者言葉

いつの時代にも世代語（位相語）といつて、年代や階層によつて使ふ独自の言葉がある。若者言葉（若者語）もその一つであるが、現代の流行の現象を見てみると、今までと異なる意識や感覚があり、それが國語の根底に關はり、また、國民の變容に繋るのではないかと思はれる。

メツチャやチャヨーは程度が甚しいことを強める語で、流ししては取り代つていく。使ひ過ぎるとその程度で表せなくなり、別の強調語を必要とする。この語は片假名で表記するのがふさはしいほど感覺的、生理的な記號で、強い叫びとも聞える。スゴイツは連用句で、やはり力を入れて發音して、感情を露骨に示す。強調表現でどれだけ相手に傳はるのか、實質的な内容がないだけに、話し手の自己満足に終る場合が多いのではないか。

ウツソツ、ホント？、マジ（デ）？はその語本來の意味はなく、また、反論でもなく、同意、同調して會話を滑らかに進ませる。言葉が感覺的な符牒のやうになり、話し手と聞き手が同じ仲間うちであることを確かめ、安心するはたらきをする。同じ世代の中に生き、同じ價值觀を持つ

て、同じ行動、思考をする者どうしの連帶意識が含まれる。今の若者は他と比べて自分だけが目立つことを嫌がる。みんな並みで、同じ範囲内にすることに安住する。周囲から變り、浮いて、除け者にされることを恐れる。周りの雰囲気を守られてゐるのを心地よしとする。

ヤバイはもと盗人や香具師の隠語で、身に危険が迫るさまを言った。これが若者言葉では、ヤバイほど、つまり自分の感情が震へて、搖さぶられるほど、良い、味がうまい、逆に、困つたなど、肯定、否定の両方に使ふ。やはり強調の感情表現で、單調、平凡に流れ、その内容がいづれ理解されなくならう。

ビミョーはその語本來の意味を離れて、自分の意見や判断をはつきり言はずにその場を切り抜ける、婉曲に斷つたり否定的に言つたりする場合に用ゐられる。明確に意志を傳へず、消極的な逃げの姿勢で、發展がない。ワタシ的二ハは私としてはと、はつきりさせずに、何となく自分の考へを印象づける。く系、ミタイナ、トカ、トイウカ、ナンカ、感ジデなど、一見やさしく柔かく、へり下つてゐるやうである。しかし、内實は言ひ切らず、自ら責任を持たず、ぼかして弱々しい。本心を隠したまま周囲の空氣に合はせようとする言ひ方が病魔のやうに若者の心に入り込んでゐ

る。

一時流行したジャナイデス力はいかにも自信なささうに相手に同意を求め、一方、押しつけも感じられる。まつすぐ相手に言はずに、間接的に遠まはしに聞き手に届く。また、平坦に續けて言ふところを途中で言ひさして尻上りに疑問のやうにいふ「半疑問」といはれる表現もある。相手の反應を窺ふやうに、いかにも自信がなく、相手の判断を仰ぐ卑屈さが見える。相手との間に距離を置き、中に踏み込まずに、その限界から接しようとする。人に近づかないのは思ひやりで、知らない人に聲を掛けて尋ねることも遠慮される。斷られたり、變な顔をされることを心配し、自ら傷つくことを恐れる。その他、一學年上、一歳下を一口上(下)と數のコ(個)で表現するのは簡便といふより、助數詞の常識が衰退してゐるのである。

③メール用語(ケータイ用語)

平成二十年度の文化廳による國語に関する輿論調査で、電子メールをする人は六十三%と半數を超え、パソコンによる場合は五十一%が「手紙と同様の表現」で書くが、携帯電話による場合は七十二%が「手紙よりくだけた表現」になる。また、情報機器の普及により、言葉に影響があると思ふ人は八十%で、そのうち、六十%が「漢字を書けな

くなる、四十二%が「言葉の意味やニュアンスが變わる」とする。この調査結果は將來のさらなる變化の豫兆を示し、看過できない問題をはらむ。

言葉が軽く、淺く、短く、低度化し、狭い範圍でしか通用しない、私的な符牒になつた。やたらに片假名やローマ字を使い、幼稚な繪文字も多い。手紙のやうに書式に従ひ、手間を重ねることなく、時間に迫はれ、即斷即決で受け應へする道具である。思つたこと、感じたことをそのまま言へるといふことは、面と向つては言へないといふことで在る。表現は公的な場に自己を示すことなのに、個人的でその場限りのつぶやきに終つてゐる。架空の想像世界の中に人間關係を築かうとし、目の前の人と直接に接し、向き合ふことを避け、現實と隔はりのない、遠くの人に親近感を覺える。名乗りもせず自己を隠し、無責任で無自覺に言葉による批判や非難が野放圖に廣がつてゐる。

「文のことばなめき人こそいとにくけれ」と枕草子に言ふやうに、言葉遣ひの亂れを指摘し、正さうとする動きは古くから書き留められてゐる。幼児語、學生用語などその世代独自の言葉はそれ自體に價値がある。若者言葉といふ語がなかつた前代にも若者の使ふ言葉はあつた。それは少年、青年たる自覺と誇りを持つた若々しく明るいものであ

つた。しかるに、若者言葉とことさら言はれ出した現代は、以上に述べてきたやうにその元氣や素直さが失はれ、ただ相手に氣を遣ひ、一步下り、ためらつて内に籠らうとする、弱々しさが漂つてゐる。若者らしさがなく、ものわかりのよい大人の縮圖のやうな態度である。日本人の心の内部が何か變りつつあるのではなからうか。

(4) 言語意識・態度の變質

文化廳が毎年行つてゐる「國語に關する世論調査」の平成二十年の調査で見逃すことのできない重大な次の結果が出た。

①人との付き合ひで「互ひの考へをできるだけ言葉で傳へ合う」を重視してゐるのが三十八・三%で、平成十一年度の調査より十二・四ポイント減少した。一方、「考へていることを全部言わなくても、互いに察し合つて心を通わせる」は三十三・六%で、十・三ポイント増加した。

②書き言葉と話し言葉の使ひ方で最も多いのが「相手や場面などによつて違ふので、一概に言えない」が三十三・八%、「書き言葉も正しく整えて使うべき」が三十三・三%で、後者が十一年度に比較して、九・五ポイント減少した。

右の①②のポイントの増減の十二・四、十・三、九・五は誤差の範囲内で、ほぼ同じ數値である。つまり、三項目は同じ割合で増減し、互ひに相關してゐると判断してよい。ここに、現代日本人の言語意識の一つの傾向が反映してゐよう。

以下、分析すると、①は言葉で表して考へを傳へるか、言葉を出さずに察し合ふか、簡潔に言へば、言葉か察し合ひか、といふことである。この態度が九年を経て一割も變化して、察し合ひを重視する人が増え、その差が四・七ポイントに縮まつた。これは有意差といへ、ここに日本人の言葉遣ひに對する態度に變動が起りつつあることが見て取れる。今まで述べてきたマニュアル語はコンビニやファミレス業界だけでなく、他の業種にも及び、また、若者言葉に年長者は寛容だけでなく、抵抗もなく使ふことが多くなつた。考へを深め、言葉を盡すのではなく、相手と一歩離れて氣を配り、尊重するかのやうで形だけを整へて、互ひに分つたつもりである。言葉を大切にしてみるやうで實は頼りにせず、情報機器によつて傳へ合ひ、察し合つたと満足する。ここに通信の交流はあつても、心の觸れ合ひはあるのか。人と直面せず、畫面に向つて言葉を打ち込んで、機械的に定つた字體に馴れさせられる。

この結果について、文化廳は「*スベ*（空氣讀めない）」が流行語になつたことがその背景と指摘し、「聲高に主張するより、言葉の文脈などから相手の氣持を察しよう」という意識が強くなつてゐるのでは」と分析する。その場の「空氣」や雰囲気を重ね、調和を亂さず、自分の言葉は抑へ、うまく處していかうとするのである。これでは話し手と聞き手が交流し、理解し、人間關係を深めることができない。言葉が淺く、薄くなるのと比例して、人間の相互の關係も淺く、薄くなり、結局、言葉による自らの人格形成も難しくなつてゐるのではないか。言葉が機能を失ひ、言語の價値が考慮されないといふことは、言葉を使ふ人間に影響する。といふことはその人自身も言語の力、生きる力と價値を失つていくといふことである。

次に、②については言葉を正確に使はうといふ態度が①と同じ程度に變化し輕んじられてきてゐることを示す。「相手や場面などによつて違ふ」といふことはやはり全體の空氣の中で言葉の使ひ方が左右され、そこに言葉の正確な基準や原則がないといふことである。言葉を正しく使ふべしといふ心懸けもなく、相手や場面に自分を合わせるだけである。語句や慣用句の知識の衰退と軌を一にして、言葉の規範意識も正しさを求める意欲もなく、言葉による人間形成

ができるはずがない。機器の作つた言葉が飛び交つても、人の生まの感情を表す言葉が對面して語られなくなつた。

先に見たやうに、マニユアル語、若者言葉、メール用語は互ひに關聯して、言葉の曖昧化と記號化、形式化と道具化へと陥つてゐた。言葉が既にさうであるならば、その人自身も曖昧な態度、記號的な發想、道具を重んじる志向と精神に傾き、その言葉通りの人間になつていく。

このやうな變質はここ十年來のことで、この言葉表現、言語態度を續けていくと、どのやうな人間に變質していくだらうか。人が言葉をつくる以上に、言葉が人をつくる。言葉によつて人と人とが結びつくことができる一方、言葉によつて人を排し、斥けることができる。現實感が乏しく、道徳觀念を缺いた言葉の跋扈が將來の國語にどのやうに影響するか樂觀できない。

一、國語問題の今後

國語問題といへば、從來、國字問題が中心で、假名遣、漢字の表記の歴史と傳統を守ることが課題であつた。しかし、五十年の時が流れて、表記どころではなく、それ以上にもつと深い根底で、國語の存在と價値の根本に關する本質的な基盤がぐらつき、溶解し出してきた。昭和三十四年

に國語問題協議會が設立された時の趣意書に、「國語は危機にある」と謳はれた。確かに當時は國語の表音化の動きが根強くあり、それを阻止することが大きな目的であつた。五十年後、その動きは消滅したが、今やそれ以上に深刻な眞の國語の危機が見え出してきた。あのころ思ひも寄らず、今も注意されない、國民共通の國語の教養が退化し、國語の根幹の變化、變容、變質が目に見える形で擴大してきた。そして、この言葉の力の衰退が日本人そのものの變化、變質、變容に連動し、直結してゐるのである。

戦後六十五年、政治、經濟、教育をはじめ、あらゆる面で混亂、混迷し、日本人の劣化が指摘されてゐる。同じやうに、言葉も劣化し、衰弱してきてゐるのである。國語の建設にいかにか立ち向ふかが今後の課題である。

契沖と悉曇（その四）

谷田貝常夫

マコト二本朝ノ音ハ詳雅ナリ。何ヲ以テカ知ルトナラハ、能ク梵音ニ通スル故ニ知レリ。

『萬葉代匠記（精撰本）』で契沖は、自分が日本のいはゆる音韻にかかはる考察は、印度の文字である梵字をよく習つた結果なのだと言ふ。梵字は聖音であり、辭調和雅にして天と音を同じくし、氣韻清亮にして人の軌則たりと云へり、と述べ、さらに世尊（釋迦）は五十字を説かれた、これは五十音ではないと註して、ここより契沖なりの五十音圖へと展開してゆく。

ここまで、大した説明もせずに「梵字」といふ言葉を使つて來たが、契沖にとつて祕藥のやうな梵字悉曇とは如何なる特徴をもつ言語かを、諸書にあたつた上で、かいつまんで述べておかう。

一、梵字はサンスクリット語を表記する文字であり、サンスクリットとは、〈完成された言語〉の意味である。

古代印度には文字がなかつたのでヴェーダ諸聖典は口誦で傳授されたが、佛教が起つた丁度その頃に、プラーフミー

（梵天所説の文字）と呼ばれる文字がつくられ、文字による記録が始つた。この文字は様々な變形をとげるが、六世紀頃に使はれたのがシツダマートリカ體（悉曇しつたん）と呼ばれるもので、左横書きとなり、釘頭文字とも呼ばれるやうに、文字の頭がほとんど一直線に揃ふものとなつた。これが中國、日本へと運ばれて法隆寺にも收められ、「法隆寺貝葉」として今に残り、我々も目にする事が出来る（東京國立博物館所藏法隆寺貝葉經）。小野妹子が將來したといはれるこの法隆寺貝葉を、契沖の梵學の師淨嚴は筆で摸寫し、音譯字や句義を加へて元祿七年に、『貝葉譯經記』として世に出してゐる。おそらく契沖も貝葉を知悉してゐたであらう。

二、サンスクリット文字は表音文字である。

母音（摩多）十二字、別摩多四字、子音（體文）三十三字、重字（合成字・リガチャ）よりなるもので、その研究を悉曇と云ふこともある。字數は數へ方による。

母音十二字を試みに日本語の假名で表記すると、次のやうになる。

ア、アー、イ、イー、ウ、ウー、エー、アイ、オー、アウ、アン、アク（中天音・東密）

ア、アー、イ、イー、ウ、ウー、エ、エー、オ、オー、
アン、アク (南天音、台密)

三、梵語は古代から今に至るまで使はれてゐる言語である。印度の創造した精神文化は、梵語と切り放しては考へられない。當初から文學語、文章語であつた梵語は、印度文化の及ぶかぎりにおいて影響を與へて來たので、今なほその生命を持續してをり、印度文化の續く限り梵語は死語とはならないと信じられてゐる。

このやうな例は世界に類少く、漢字に匹敵する。パンドイツと呼ばれる印度の賢者達は今でもサンスクリット語に精通し、バラモン教の根本聖典であるヴェーダ文獻を暗誦出来る。ヴェーダ文學として古代からの膨大な文獻がある點、漢字はとても及ばない。

四、長い間、形を變へてゐない點も世界有數とされる。

すでに西紀前四世紀に天才パーニニは文典を作つた。體系化や語幹の抽出がなされて梵語は固定していつた。

佛教は始めパーリ語を聖典に使つたが、やがて梵語を採用することの便宜であることを悟つたといふ。佛教詩人馬鳴(めみょう・二世紀頃・バラモン出身で始め佛教を非難

してゐたが、論破されて舌を噛み謝らうとしたが説得され、佛教に歸依し、菩薩とまで呼ばれる高僧になつた)は古典梵語文學の先驅者とされる。

五、語彙が非常に豊富であり、文章はほとんどが韻文である。

佛教經典には偈げと呼ばれる詩の多いことに氣づく。「諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅爲樂」といつたものを偈といふ。

六、印度人は古代から「ことばが世界を創る」と信じて來たこともあつて、他のいかなる言語よりサンスクリットに高い聖性を與へてきた。

シツダマートリカ(シツダムニ悉曇ニ梵字)が中國には七世紀(隨以前に中國には梵字が見當らないといふ)にもたらされて、表音文字の珍しさからか語學的な研究がなされ、中國語の音韻研究に大きな寄與をした。悉曇は日本にも入つてきたが、こちらはどちらかといふと字母やマントラ(眞言)が重視され、呪術的、神祕的な方面に力が注がれた。

平安時代になると空海は、佛教の究極をきはめるには梵字を學ぶ必要があると思ひ至つて渡唐し、印度僧般若三藏から直接梵語を學ぶ。密教の奥義を師惠果から傳持し歸國した後、空海は梵字の書體、讀み、字義、その功德などを説き、密教に必須の基礎智識とした。佛教は膨大な經典を讀上げなければならぬため、僧は漢字の讀みに苦勞したが、そのやうなところから假名が生れ、その假名で漢字も梵字も讀まれるやうになつた。平安中期のころは、日本語が急激に複雑化した時代だと言へよう。元々の大和ことばに加へ、漢字や梵字による言語世界が擴がり、表記も吳音、漢音の漢字、梵字、片假名、平假名と増え、それが和歌、物語、隨筆、佛教經典、諸法例への應用となつていつたのである。言語の面からすると大變な時代であつたと言へよう。否應なしに言語的な整理が必要とされたところに天台僧明覺が現はれて日本語構造をかなり明確なものにし、五十音圖の元となる五音圖を作つたのである。

五十音圖を明確に打出したのは、淨嚴と契沖である。佛教學、梵學から出たもので、この二人は、この五十音圖が世界中の音韻を網羅する普遍的なものと思ひこんで作つたのである。

種々音聲ありといへども 其數五十に過す 唯人間のみ

ならず 上は佛神より 下は鬼畜に 至るまで此の聲を出す 中略 非情の聲までもこれより外に出る事なし

そして契沖は梵字の文字構成にならひ、一字が〈子音＋母音〉で成ることを漢字を使つて表現した。「ク」を「加」の下に「于」を添へて示した「𑖑」。本項（その一・本誌百八十七號參照）但し、

一、古代印度・アーリア語では、a音が多用されたため、〈子音＋a〉で一文字の基本形としてゐる（母音の半體符號）。梵字の「か」は「𑖕𑖄𑖔𑖀」といふ字であり、これに「い」を示す符號をつけると「𑖕𑖄𑖔𑖀𑖔𑖀」となる。aがとれて「い」交代する、𑖔𑖀 ではない。

二、一方で、母音を取去る記號があつて、或る梵字を子音音とする場合もある。𑖕 (𑖕) は子音kを示し、日本語には無い文字である。

三、長音があるのも梵字の特徴である。「イー」といふ符號をつけて「𑖕𑖄𑖔𑖀𑖔𑖀 (キー) となる。

四、合成字（リガチャ）も盛んである。漢字にも或る字が、例へば焱（火）や「𑖕𑖄𑖔𑖀」のやうに幾つもの字の合成であることがあるが、梵字でも「𑖕𑖄𑖔𑖀𑖔𑖀」や「𑖕𑖄𑖔𑖀𑖔𑖀」といつた字が作られる。特に日本に入ると、有難みや神祕性を増すために、合成法

則を無視した「き」(大日如來)や「𑖀」(文殊菩薩)といった梵字が作られ、佛壇などに飾られるのである。
五、契沖によると、拗音も梵字より始つたとされる。

陀羅尼といふ一首の咒文は、梵語が基本である。契沖は「和字正濫鈔」において「沙石集に和歌は日本の陀羅尼なりといふ」と、おそらくは西行の語つた言を引用する。「無量の功德を摠攝し任持する故なり。其中に一字に多義を含む意をもて短き和歌の深き意を含むをかくは言へり」と書き、「委しくはば和歌につづらぬ先の四十七言早く陀羅尼といふべし」とある。へいろは歌の四十七の假名そのものが陀羅尼だとするのである。もつて、契沖の梵語への傾注が知られるのである。

ローマ字と長音

上西俊雄

音を表してゐるとしたのがヘボン式や訓令式。翻字式ローマ字といふのはみたことがなかった。

ウィキペディアといふネット上で作成され無料で公開されてゐる多言語百科辞典（英語版）のローマ字の項は最初に方式を翻字（Transliteration）と轉寫（Transcription）の二つに分かつ。今假に轉寫と譯したものは英語の語源で

言へば transcribe 轉寫すること、轉寫されるものは何でもいのであるが、翻字が文字の轉寫といふことなので、この場合は音の轉寫といふことになる。普通ローマ字と言へばヘボン式にしる訓令式にしる音の轉寫だ。ウィキペディアは轉寫式を更に音韻論的方式（Phonetic）と音聲學的方式（Phonetic）に分かつ。訓令式もしくはその元となつた日本式が音韻論的方式でヘボン式が音聲學的方式といふわけだ。

音を轉寫するといつても、音を表してゐるのは假名なのだから翻字とどこが異なるかと言へば、ヂとジ、ツとズを區別せず、キエヲとイエオを區別せず、ワと語中のハ、イウエオと語中のヒフヘホを區別しないこと。これらは同じ

翻字式ローマ字がなければ假名漢字變換もできないが、假名漢字變換用のローマ字はとても實際の表記に耐へるものではない。それでヂとジ、ツとズを書き分ける方式を考へて擴張ヘボン式と名づけた。

少し英語をやつた人なら needs をニーズと書き、kiss をキッズと書くことの不合理であり、ローマ字に合せて假名字母が制限されてゐることが判るはずだ。ローマ字に合せてヂやヅ或はキエヲや語中のハ行音は餘分の假名だとされてゐるのだ。

擴張ヘボン式で轉寫してみると歴史的假名遣が表音性においても優つてゐることが判然。それで、もし戦前に翻字式が行はれてゐれば戦後の表記改革はなかつたか、漢字制限の範囲にとどまつてゐたのではないかと思ふやうになつた。

震災後のある會で中國經濟が専門の矢吹晋氏と鄰あつた

ことがある。名刺を交換したところ、擴張へボン式とは何だと云ふので一言説明したら朝河貫一博士の方法と同じだといふ。氏より資料を送ってもらつて、昭和四年の『入來文書』に transliteration の宣言があり、ヂジヤヅズの書き分けがまさに同じ方式で、つまりヂ (ji)、ジ (zhi)、ヅ (zju)、ズ (zu) と書き分けられてゐることを知つた。朝河博士のやうな權威が用ゐた方法がなぜ八十年以上も埋もれてゐたのか不思議だ。

さて、長音のこと。翻字式では長母音といふことを氣にすることはない。しかしある種の母音群がしばしば長母音と呼ばれることがあるのも事實だ。

嚴密に言へば長母音はいくら發音し続けてもまつたく變化しないといふ點で二重母音とは異なる。だから同一の母音よりなる母音群なら長母音である可能性が高いと思はれるかもしれない。しかし、大抵の場合、同一母音が竝んだ場合は、長い一つの母音ではなく、單に同じ母音の繰り返しのものだ。このことは自分でさう感じるといふだけでなく、何人かの友人に徴してもさうだ。

昭和六十一年の内閣告示はこの區別を無視し、どちらであつても才段の假名に才を添えて書くとした。其處で擧げられてゐる例について歴史的假名遣を擴張へボン式で轉寫して點檢したところ、長音の例はなかつた。歴史的假名遣で同じ母音でなく、二重母音のやうに見える場合に却つて統合されて單一ストレスで二拍の母音となる場合が多い。

内閣告示のなかで長母音らしきものを含む例として擧げられた語句は次の通り。なるべく假名表記が見えないやうな表記形を用ゐ、假名を用ゐる場合は歴史的假名遣にした。

丸括弧内は歴史的假名遣の擴張へボン式による翻字。逆アポストロフイは語中のハ行音。ア段でのみ兩唇半母音として實現する、つまりワと發音される。また母音連續 *eu* は *autumn* のそのやうに、*eu* は *Europe* のそのやうに發音されると規定。これは語中のハ行音の介在を排除しないことを覺えてゐて欲しい。

お母さん (okasan)、お祖母さん (obasan)、兄さん (

nisan) 'お祖父さん (ojisan) 'お寒うごやいます (osamugozaimasu) '空氣 (kuuki) '夫婦 (fufu) '嬉う存じます (ureshizonzhimasu) '胡瓜 (kiuri) '墨汁 (bokuzhi) '注文 (chuumon) '姉さん (neesan) 'ええ (ee) 'お父さん (otousan) '燈臺 (toudai) '若人 (wakaido) '鸚鵡 (aumu) '買はら (ka'au) '遊ばら (asobau) 'お早やう (ohayau) '扇 (a'ugi) '抛る (na'uru) '塔 (ta'u) 'よごせう (yoideseu) '發表 (happu) '今日 (ke'u) '蝶々 (te'ute'u)

以上はア段から才段までの例をあげたところからとつた。内閣告示では段と言はず、列となつてゐるが、五十音圖からすると段の方がわかり易いので書き換へた。「買はう」の場合 au は autumn の au のやうに發音されるから、すでにア段の母音でない。従つて語中のハ行音は發音されない。

つぎに示すのは「次のような語は、才段の假名に『お』を添えて書く。」といふ規定の後にあがつてゐる例。

狼 (o'okami) '仰 (o'ose) '公 (o'oyake) '氷・郡 (ko'ori)

蟋蟀 (ko'orogi) '頰・朴 (ho'o) '酸漿 (ho'odzuki) '炎 (hono'o) '十 (to'o) '憤 (kido'oru) '覆 (o'o'u) '凍 (ko'oru) '爲果せる (shio'oseru) '通 (to'oru) '滯 (todoko'oru) '催 (moyo'osu) '愛し (io'oshi) '多 (o'oi) '大 (o'okin) '遠 (to'oi) '大旨 (o'onume) '大凡 (o'oyoso)

「歴史的假名遣で才段の假名に『ほ』又は『を』が續くものであつて、才段の長音として發音されるか、オ・オ、コ・オのやうに發音されるかにかかわらず、才段の假名に『お』を添えて書くものである。」と亂暴な説明がある。

本來の音が鄰接する音に影響されて類似の音に變化することを同化 (assimilation) といふが、廣い意味では音便といつてもよいかもしれない。「嬉う存じます」の場合とは同化は前方 (progressive) に對して行はれ、「お父さん」の場合には後方 (regressive) に對して行はれ、「若人」の場合には相互 (mutual) に對して行はれてをり、「嬉う存じます」の場合に入り渡り音が生じてゐると記述できる現象だと思ふ。同化があれば、一つの單位のやうに聞えるから、その印象は大坂 (o'osaka) や飯田 (i'ta) の場合とは異なる。「若人」のやうな場合の戦後の表記はこの同化を先取りしよう

と入り渡りの假名一字を取り替へたに過ぎず、結局は相互同化を後方同化に變へたに過ぎない。

西洋人は母音連續を嫌ふ。いはゆる長音なるものは母音連續を疊み込むための便法だったのではないだらうか。ワ行子音や語中のハ行子音は母音連續の離合を示す徴憑の働きがあった。假名字母制限は、その徴憑を落として母音連續を増やした上に、アクセント符で疊み込む方法も斷念した。

TPPがどうなるかわからないがローマ字で地名人名を表記しなければならぬ機會が増えることは確實。

朝河貫一博士の智慧に學ぶとしても、まづは正書法の復活が先だ。音韻變化があつたわけでなく、八幡製鐵所は今以てYataiであることを悟らなければならぬ。

(かみにし) としを・擴張へボン式提唱者、本會評議員)

玄

日中英 ことばの雑学 (二)

高田 友

健太…此頃、ちよつとキリスト教に關心があるんですが、日本語のキリスト教用語について、教へてください。先づ第一に、キリストを「基督」、イエスを「耶穌」と書くのは、どういふ理由に據るものなんですか。

高田…日本のキリスト教用語は、大抵が中國語から來てゐる。「耶穌」は中國語で、「イエス」と發音するんだ。

健太…なるほど。「耶穌」を「ヤソ」と呼んで、キリスト教を誹謗する爲に使ふ人もゐますね。もともとの發音が「イエス」なら、不思議はありません。

高田…ただ、中國語では「蘇」の草冠のない字を使ふんだが、その字が日本では一般的でないので、「蘇」で代用したといふわけだ。

健太…「基督」も「基」が「き」ですから、何となく解ります。

高田…「基督」は現代の北京語では「チードウ」といふ發音なんだ。ただ、南方音では「キ」になる。「ホンコン」にしても、「ペキン」にしても南方音なんだ。ヨーロッパ人は南方から入つて行つたから、北京語よりも、南方音（廣

東語など）の方が馴染んだのだらう。

健太…イエス・キリストは「イエス・チードウ」になるんですね。ぢやあ、キリスト教のことも、「チードウ教」といふわけですか。

高田…中國では、カトリックとプロテスタントは別の宗教のやうに扱はれてゐて、カトリックは「天主教（ティエンチューヂャオ）」、プロテスタントは「基督教（チードウヂャオ）」と呼ぶんだ。もつとも、天主教徒が自分で、「基督教徒」と名乗ることもあるから、混同はするんだらうけどね。

ところで、カトリックでは、聖母のことを「童貞マリヤ」と呼んだり、尼僧（シスター）のことを「童貞様」と言つたりすることを知つてゐるかい。

健太…ああ、それですね。「童貞」つて、男のことですよ。女なら「處女」になるはずなのに、なんでだらうと思つたのに思つてゐたんです。勿體ぶつて、古い日本語を使つたのかなと思つてゐましたが。

高田…中國語では、「童貞」は男にも女にも使ふんだ。もつとも別に「處女」といふ言葉もあるんだがね。

健太…さうだつたんですか。長年の疑問が氷解しましたよ。

高田…それにしても、キリスト教の用語がみんな中國語から來てゐるのには驚くよ。戰國時代のカトリックの宣教師も、明治初期のプロテスタントの宣教師も、中國經由で入つてきた人が多かつたから、中國語の用語を使つて、布教したんだね。

健太…どんな言葉がさうなんですか。

高田…神のことは今では「上帝(シヤンデイ)」と呼ぶんだが、以前は「神(シエン)」。これがそのまま「神(かみ)」になつた。また、戰國時代のカトリックは、「天主」と呼んだが、今でもカトリックではこの言葉を使ふことがある。

(注…中國語片假名表記の「ン」はコ、「ん」は品を表す)

健太…カトリックが傳はつたちよつと後から、御城の天守閣が出來るやうになつたから、「天守閣」の「天守」の語原は「天主」だといふ説を讀んだことがあります。

高田…うん。一時はその説が有力だつたが、今では否定されてゐるやうだね。

他に中國語に由來するキリスト教用語を挙げれば、「天使」「聖母」「祭司」「聖靈」「榮光」「全能」「天國」「地獄」など、いくらでもあるんだよ。

健太…ふうん。ヨーロッパ語が中國語を經由して、日本語に入つて來たんですね。

キリスト教以外の言葉でも、さういふのはたくさんあるでせ

う。「政治」とか「經濟」とかいふ二字熟語もさうなんぢやありませんか。

高田…いや、さういふ學術用語は、逆に、明治初期に日本で譯を作つて、それが中國に傳はつた方が多いやうだね。「政治」「經濟」「哲學」「物理學」などは、中國でも使つてゐるが、これは日本から入つて行つたものだ。

學術用語でも、中國が先だといふものも多少はある。「整數」の「整」は「全體の」「丸々の」といふやうな意味なんだ。「整箇日本」と行つたら、「日本全體」といふことだ。そこで、小數のついてゐない「丸々の數」といふことで、「整數」になつたんだね。

健太…「全體の」「丸々の」と言つたら、英語では whole ですよね。……ひよつとしたら、ひよつとするぞ。

高田…なんだね。君の推理は凄いから、期待できるね。いや、今度は何が言ひたいか、もう解つたよ。

健太…英語では「整數」のことを whole number といふんぢやありませんかね。

高田…さうだ。君がそれに氣づいたんだと僕も思つたんだよ。漢字の意味をよく考へてみると、なるほどと納得できるものだ。健太…ヨーロッパ語、とくに英語が日本語と中國語の兩方に痕跡を留めてゐる例ですね。

高田…日常會話で使ふ言葉に面白い影響を與へてゐるものもある。英語では、「戀をする」を fall in love と言ふ。

健太…え。まさか、日本語の「戀に落ちる」は、そこから來てゐるとか。

高田…まさかぢやないよ。江戸時代には「戀に落ちる」なんて言ひ方はなかつたんだ。英語の眞似をして作つたんだ。

健太…それは驚きました。

高田…ところが、中國語でも、「僕は彼女に戀をしてしまつた」といふときは、「我因她陷入戀了」と言ふ。「我、她ゆゑに戀に陥ち入りたり」と訓讀できるね。これも、fall in love の直譯であることは間違ひないだらうね。

健太…「她」が「彼女」なんですか。「彼」のことを「他」といふのは知つてゐましたが。「他」は (タ) と發音するんですね。

「她」はどう發音するんですか。

高田…これもやつぱり ta だ。he は「他」、she は「她」、it は「它」。

發音はみんな同じだ。

健太…あッ。閃いた。

高田…言つてごらん。

健太…もともとは三人稱單數の代名詞は一つしかなかつたのが、英語の影響で漢字を書き分けるやうになつたんでせう。

高田…君の推理力は凄いね。戀に陥ちてしまひさうだ。

健太…僕は男は嫌ひですからね。特に御年を召した方は。

高田…怖ろしい残酷なことを言ふ美少年だね。ところで、中國語の三人稱單數の、元々の漢字はどれだつたと思ふかね。

健太…うん。それは間違ひなく、「它」です。「他」なんて漢字は、發音が「它」と同じで、意味もなんとなく近さうですよ。他人」を聯想しますものね。だから、無理矢理藉りて來たやうに思へます。そして、そのニンベンをランナヘンにして、she の意味で使ふやうになつたのでせうね。

高田…そのとほりだ。動物を指す場合は、「牠」といふ字がある。動物だからウシヘンを付けたんだ。今では「它」で代用するのがふつうだがね。

健太…いつそケモノヘンにすればよかつたのに。

高田…古い版の中國語聖書では、「牠」といふ字を使ふことがあるんだが、何のことだと思ふかね。

健太…シメスヘンは、神に關係のある部首だから、「牠」は神を指す時に使ふんでせうね。前に神が出て來て、また「神」とか「上帝」とか「天主」とか同じ單語を反覆するのを避けて「牠」といふんでせう。

高田…また當りだね。キリストのことにも使ふんだが。流石は、前回の摸試でトップを取つた秀才浪人だ。

健太…「秀才浪人」なんて、皮肉が混つてゐますね。

高田：まあ、「浪人」に「秀才」を付けるのは形容矛盾ではあるがね。

健太：そこまでおつしやることはないぢやありませんか。

高田：英語の直譯の熟語をもう一つ教へよう。make both ends meetといふ熟語は知つてゐるよな。

健太：「赤字を出さずにやつて行く」と覺えてゐるんですが。

高田：うん。でも、そのもともとの意味を考へてみたことがあるかい。

健太：待つてくださいな。

高田：この熟語のもう一つの有名な譯を知らないかな。

健太：ううん。何か聞いたことがあるな。あッ。

高田：論理を辿れば解らないはずはないよ。特に君なら。

健太：うん。「帳尻を合せる」だ。解つた。解つた。both ends は、「兩方の端つこ」で、収入欄と支出欄の、頁の一番下の合計の金額を書き込む粹のことだ。

高田：さうだよ。後は聞かなくても正しい答だと解るが、まあ、言つてごらん。

(たかだ　　いう・塾講師)



「今昔秀歌百撰」拾遺

天智天皇御製

渡津海わたつみの豊旗雲とよはたもに入日いりひさし今夜こよひの月夜つきよ清明あきらかくこそ

「大海原の上の天空の豊旗雲に入日がさしてゐる。今夜の月はさぞ清く明るいだらう」といふ意。

『萬葉集』中の名歌とされる。「渡津海」とは海の神。轉じて海そのものをいふ。單に景色としての海ではなく、神秘的な海の神といふ思ひが詠み込まれてゐる。

「豊旗雲」は、旗のやうに横に豊かに棚引く雲。「豊」とは豊葦原瑞穂國とよあしはらのみづほのくに・豊秋津島とよあきつしま（日本國の別稱）、豊神酒とよみき（酒の美稱）、豊明とよあか（朝廷の酒宴）などといふ言葉もある通り限り無い豊かさを表す美稱。物質的な豊かさといふよりも信仰的な豊かさを言つてゐる。

「月夜」は、月のある夜といふ意ではなく、月影そのものを言つた。古代では影と光は同語である。

「清明くこそ」は様々な読み方があるが、佐佐木信綱氏の「あきらけくこそ」が最も良いと思はれる。「清らけく明らけく」が日本人の倫理の最高の價値とされる。日本民族は、汚れや陰湿さを嫌ふ。そして清らかさ爽やかさ潔さ

が尊ばれた。「あいつは悪人だ」といはれるよりも「あいつは汚い奴だ」といはれることを恥とした。

コソは「こそあらめ」を省略した語であり、「きつとくであるぞ」といふ断定的な物言ひである。

非常にスケールの大きい歌で、上御一人かみごいちにんでなければ歌ひ得ない歌。朗々と歌はれたのであらう。讀む者も朗々と唱へるやうに歌ひあげなければこの歌の精神を感得することはできない。

茫洋たる大海原の水平線上に旗のやうに横に棚引いてゐる雲に夕日がさして黄色に染まつてゐる雄大なる景色を眺めつつ、今夜の月は清く明るく照るといふことを断定的に予想されてゐる。てらふことも力むこともなく莊嚴に歌ひあげてゐる。

上の句の景觀は單なる自然風景ではなく、神が生みたまひし日本の自然を讃へた。「渡津海の豊旗雲」といふ言葉に、神代以來の自然の中に神を見る心が表れてゐる。

日本人にとって非常に親しい存在である海と月とを題材として、高邁にして雄大なる日本民族の中核精神が歌ひあげられてゐる。

宮中晩餐會、天長節の宴會の儀などの場ばに使用される皇居・昭和新宮殿の豊明殿といふ名稱は、昔の宮中における

饗宴の一つであった「とよあかりのせちま豊明節會」にちなんだものと承る。その豊明殿の壁畫には、中村岳陵氏作の原畫による綴れ織りの「豊幡雲」が用ゐられてゐる。

この天智天皇の御製を拜して思ひ起すのは、昭和天皇が昭和十一年に、『海上雲遠し』と題して詠ませたまひし次の御製である。

紀伊の國の潮のみさきにたちよりて

沖にたなびく雲を見るかな

この雄大なるしらべも、かみでいちにん上御一人ならではの言葉に盡し難い素晴らしさである。魂に響いてくる。如何なる大歌人といへども、歌ひ得ないしらべである。

天智天皇・昭和天皇の御製には、人と自然との一體感・生命の交流がある。客觀的に歌つてゐるやうで、そこに大いなる自然に驚異し、自然と一體となつた心といふものが表白されてゐる。兩天皇の御製を拜すれば、神代以來のわが日本民族の雄大なる自然觀が、上御一人によつて脈々と傳承されてゐることが明らかとなる。

(四宮正貴　しのみやまさき　四宮政治文化研究所代表)

わたの原八十嶋かけて漕ぎ出ぬと

人には告げよ海人のつり舟

參議堂（古今和歌集・卷九）

『小倉百人一首』にも採られてよく知られるの歌は、『古今和歌集』では、遠い旅といふ意味の「羈旅歌」といふ部に配されます。

表向きの意味をとると、「大海原に幾つも點在する嶋々を直指して行くことになつたのだと告げてくれ、漁師の釣り船よ」と、あたかも遠い世界に雄飛するかのような印象を持たれるかも知れません。しかし、事實は全く逆で、この歌の詞書には「隱岐國に流されける時に、舟に乗りて出で立つとて、京なる人のもとに使はしける」（隱岐島に配流となり船に乗つて出發する際に、京都にいる人に送つた歌）とあるやうに、小野篁が遠流といふ、流刑の中でも最も重い刑罰を受けて隱岐の嶋（島根縣隱岐郡）に流される際の歌でした。「漕ぎ出すことになつた（漕ぎ出ぬ）」と、完了の助動詞「ぬ」を用ゐて事が完了してしまつたやうな言辭には、自らの意思でなく船出をすることになつた意味が含まれます。

事の理由は、第十九次の遣唐副使でありながら、使節派

遣の無意味さを諷刺した『西海謠』という詩を作り、國家を批判したことが嵯峨上皇の逆鱗に觸れたことにありました。

この度の遣唐使團は、第二十次の遣唐使派遣が菅原道眞の建議により停止となり、結果的には最後の遣唐使となるのですが、その直前第十八次遣唐使團は、第三船が遭難し、小野篁の一族も巻き込まれて命を落してをりました。しかも、今回の使節團も承和三年〔八三六〕・四年と立て續けに渡航失敗、三度目の挑戦に際して大使藤原常嗣が乗船豫定の第一船を篁の第二船と乗り替へさせたという專斷に憤り、篁は病と稱して乗船を拒否した上、風刺の詩を作つて國政を批判したのでした。篁としても船團の乗組員を預かる身としての責任感あつての行ひだつたと思はれますが、かうした事情が、政道批判の詩作につながつたのでした。結果、嵯峨上皇の怒りを買つて、本來なら絞首刑に處せられるべき所を、罪一等を減ぜられ、遠流の刑で（承和五〔八三八〕年）隱岐の島に流罪となつたわけです。

ちなみに、平安時代は、この嵯峨上皇が天皇在位時に、死罪が廢止され、遠流か禁獄に減刑されるやうになりました。以來、天皇二五代、三四七年もの間、保元の亂（一一五六）で藤原信西が復活させるまで律令による死刑は姿を消

します。

ただし、大宰府に左遷されて憤死したかのやうな菅原道眞と較べると、篁は逞しく復活しました。作者名の官職に參議とあるやうに、承和七年（八四〇）二月には赦されて上京し元の位に復します。復歸後は法家の官僚として要職を歴任、承和十四年（八四七）には參議として公卿に列なり、仁壽二年十二月（八五三年一月）從三位で薨じました。歌では「八十嶋かけて」とたくさんの島々が詠まれてゐることから、大阪灣から瀬戸内海經由で向かつたと思はれがちですが、鎌倉時代に隱岐に流された後鳥羽天皇の行路や、流刑地へは陸路で隱岐の島對岸の美保關（島根縣八束郡）までは、陸路をとつたのでせう。文飾上の表現であつたと想像されます。

しかし、流刑地に赴く様子を大海原の先にある島々を指して行くのだと伝える心情には、剛直な作者のやせ我慢にも近い氣概を感じます。院政期・鎌倉期以降、小野家は法律の名門として聲望を集めますが、その頃から晝は朝廷に、夜は閻魔廳に冥官として出仕するという傳説も、そうした生き様が生んだものでせう。

（相田満 あひだみつる 國文學研究資料館助教）

しらとりはかなしからずや空の青

海のをにも染まずただよふ

若山牧水（若山牧水歌集）

若山牧水が二十二歳、明治四十年、早稲田大學の學生であつたころの短歌です。流麗な聲調で、韻律が美しく、哀愁ただよふ作品です。多くの人に愛唱されました。作曲家古關裕而は、「白鳥の歌」と題して作曲し、歌曲としてゐます。

「白鳥はかなしからずや」と問ひかけて、廣大な空と海へととぶ白い鳥の姿を浮かびあがらせ、この青に染まらぬ白い鳥を哀しみ、いとほしんでゐるのです。これは單なる寫生の歌ではなく、牧水自身の心の内面を凝視する心象詠でせう。白い鳥は牧水自身の象徴なのです。清涼音のサ行音、かたい感じのする力行音、タ行音（し、そ、か、た、と）などの語韻をもつことばの組み合わせによつて、美しい聲調を生みだし、また、「かな」からずや」「うみの、あをにも」「そまず、やだよふ」と、△三・四△の音律をくりかへし、「空の青」「海のを」とたたみかける表現によつて、情調を高めてゐます。

この短歌の定稿に至るまでの推敲の跡をたどつてみるとさりげない表現のかげに、いかに細心の彫琢があつたかが

わかります。

明治四十年十二月一日發行の雑誌『新聲』に最初に發表されたときは、「白鳥は哀しからずや」「海の青空のをにも」となつてゐたのです。しかし、翌年出版された第一歌集『海の聲』には、第一句を「白鳥」と振假名し、第三句第四句の順序をかへ、「空の青海のをにも」と改作しました。歌の調べの上では重要な改作です。

明治四十三年出版の第三歌集『別離』では第一歌集と同じ表記で、戀愛の歌八十六首の中に入れ、連作の一首として發表しました。この歌集の出版によつて、牧水は抒情歌人としての聲價をいちだんと高めたのです。

その後、大正五年出版の自撰歌集『若山牧水歌集』では「哀し」を「かなし」として、前掲の表記で定稿となりました。この間、十年の歲月が流れたのです。

牧水は短歌朗詠の名手と言はれてゐますが、作歌に當つても、舌頭千轉、低誦し高誦し、歌の言葉のひとつひとつの音韻や音律を確かめながら、表現を吟味したのです。

古代、歌は、相手にうつたへるために、歌ふことによつて發生したと言はれますが、萬葉集を愛誦してゐた牧水もまた歌ふことのできる歌を志向した歌人のひとりです。

この歌は、歡び、哀しみ、苦しみながら、つひに、成就

することのなかつた五年間にわたる戀愛の中から生まれたのですが、生涯、旅と酒を愛した牧水の人生そのものを暗示してゐるやうにも思ひます。

この歌を、次の戀歌と並べて低誦してごらん下さい。哀愁は更に深いものとなるでせう。

海哀し山またかなし酔ひ痴れし

戀のひとみにあめつちもなし

くちづけは永かりしかなあめつちに

かへりきてまた黒髪を見る

(松本 哲夫 まつもと てつを)

式

葛の花、踏みしだかれて、色あたらし。

この山道を行きし人あり

釋逍空（海やまのあひだ）

大正十四年、改造社から刊行された、釋逍空こと折口信夫の第一歌集『海やまのあひだ』の巻頭に配された一首。昭和二十九年の『中央公論』に、「遺稿」として連載された「自歌自註」によると、「山道を歩いてみると、勿論人には行き逢はない。併し、さういふ道に、短い藤の花房ともいふべき葛の花が土の上に落ちて、其が偶然踏みにじられてゐる。其色の紫の、新しい感覺、ついさつき、此山道を通つて行つた人があるのだ、とさういふ考へが心に來た」と、その作歌事情を自ら詳しく語つてゐます。この歌の作られた大正十三年、逍空は二回目の壹岐旅行を果してゐます。この島についても同註では、「傳説の上では神代の一國」と捉へ、「それだけに海としても個性があり、山としても自ら山として整うた景色が見られた」と評してゐます。自らの處女歌集の題をつけるにあつて、壹岐の景觀が歌人の靈感を促したことが察せられます。

さてこの歌については、作者本人も「葛の花が踏みしだかれてゐたことを原因として、山道を行つた人を推理して

してゐる訣ではない」と辯明してゐるやうに、飽くまでその視點は葛の花に置かれ、それを踏みしだいた人間に力點を置いてゐるわけではありません。「あたらし」については、古語で解せば「惜し」となり、葛の花が踏みにじられた色の様子を口惜しく思ふ氣持ちといふ解釋になります。しかし作者自身、「其色の紫の、新しい感覺」と明確に註してゐるやうに、現代語の「新しい」で解してもまづ差し支へないでせう。

壹岐の山道の實景を詠んだはずのこの歌も、民俗學者・折口信夫自身の學問への心意氣を感じさせるものがあります。初學者が右も左もわからぬまま入り込む學問の道は、まるで見知らぬ山道のやうに、鬱蒼として、出口が見えることがありません。しかしながら、そんな人氣のない山道であつても、必ず先達といふものが存在するものです。學問の世界においても、自分の獨創だと思つたことが、實はすでに古い時代の先學者が、早いうちから論證してゐた、といふことがしばしばあります。そのことについて、とかく若いうちは「惜し」と捉へ、悔しく思ひがちです。しかし先達が切り開いた道を、「色新し」と捉へ直すことができれば、却つてさうした先行研究から、自分自身の新しい着想を一層深く切り開くことが可能になるのではないでせ

う。

東日本大震災鎮魂の歌

上山忠男（防府市）

震災ぞ大和心の雄々しさを異國の人ぞほめたたへける
 震災や昔の敵は今日の友 友達作戦恩を忘れじ
 國民の悲しみし時大君の仁慈のこころ感極まれり

松本哲夫（平塚市）

〈福島縣浪江町を出でて平塚へ〉
 漂白の思ひさらなり相模野の 楠の木陰に蟬のこゑ聴く
 天霧らふ相模の山や待宵の 花さくけさは母の忌も過ぐ

〈抒情歌人牧水を思ひつつ〉

寂しさを超えんと行きし牧水も 慕ひゆきけむ旅の西行
 寂しさに山を越えゆく牧水も 戀ひ思ひけむ旅の芭蕉を

問の世界においても、自分の獨創だと思つたことが、實はすでに古い時代の先學者が、早いうちから論證してゐた、といふことがしばしばあります。そのことについて、とかく若いうちは「惜し」と捉へ、悔しく思ひがちです。しかし先達あだが切り開いた道を、「色新し」と捉へ直すことができれば、却つてさうした先行研究から、自分自身の新しい着想を一層深く切り開くことが可能になりませう。

奇しくも本居宣長が儒學者・市川多門の漢意を指彈した論争文には、「くず花」といふ標題がつけられてゐます。もちろん折口自身、かうした國學者の後繼にあたるとはいへ、この歌についても宣長書を意識したわけではないでせう。しかしながらこの歌を敢へて廣く捉へ直せば、學問の道を「うひ山ぶみ」に準なぞへた國學者の志を髣髴させるものがあります。

（山本 直人 やまもと なほと）

『聖慮』高祖道元の祈り

安東路翠

(修證の日々)

霧深き山にこもりて終生を厳しく律す時を受けぬて

坐禪草フイなる風にひるがへり葉裏を見せしよぎる思ひを

(坐禪草は永平寺の花)

(私かなる供養)

平明にひびく御心清規の日亡き御慈父母を祈りまつらむ

亡き慈母を雲に偲びて山稜の寺塔に祈りあらせらるる日

(「高倉院嚴島御幸の記」「久我通親」に御日を通されて)

嚴島の高倉院の御幸の記録温き格調尊父の筆なり

京の風吹きこし来れば深草の慈父の玉背廣やかになりて

御筆先偲び賜へば御父の寛き心根に近づき給ふ

梅が枝に託し来たりし京の地の父の御言と遠き御息吹

(高倉院の病氣治癒の祈りの爲通親公再度嚴島に詣でしを

知り)

二度を詣でし御社の海光に深めし眞如の色かはらじ

御筆先氣づかざりしを二度の強き祈りを心眼に聞く
御母を守りし慈父の寛容の豊けき御影出でつ隠れつ
時鳥か慈父母の御名を呼び賜ふ吉祥山の霧のしののめ

(吉祥山に御本山建立)

山川も皆正法眼を藏しゐて禪師の御意の眞理を證す

雪三尺嗣法綬したる明け方の梅に見えくる眞の花開

月の夜の堂の一人の「定」なれば讀經にたどる雪のしげきを

無に徹し定にあられし御心に月はしづけく諸堂を照らす

永平の盛なる水のせせらぎに寺塔は建ち立つ金剛の秋

(木の芽峠に立たれて)

御父の五十四壽を旅立ちし供養の時節まぶしかりけり

偲ぶれば尊き御影明るかり峠に立ちて繼ぐ思ひに

天の壽の五十四歳を清けくも唯喝に誦ず秋爽の朝

道元禪師の御歌(木の芽峠に立たれて)

草の葉の門出する身の木の芽山空にみちあるここちこそす
れ

後書

昨年の政權交替以來、をかきなことはかり起ると思つてゐたところに大震災、災害、混亂は日本のみでなく埃及、リビア、さらには希臘、ひいてはEUと擴がり、差別といふ言葉などおくびにも出さなかつた米國ではアメリカン・ドリームが凋んできてゐます。そのやうな大變な年も暮れようとしてゐますが、來年に向け我々としては、如何なる心構へを持すべきでせうか。

このやうな時に歌手の藍川由美さんを講演會にお呼びできたことは幸運でした。歌詞が聞き取れないやうな發聲はまちがつてゐる、日本には日本人に合つた發聲法や歌唱法があるといふ信念から探求、努力を重ね、遂には神樂、催馬樂といつた古代歌謠に至つて、歐米と異なる發聲に出會ひます。そして日本古來の樂器「和琴わじん」に氣づかれて宮内廳樂部とも接觸、日本文化の究極にある和歌披講（和歌の讀上げ）を習つて一般の人にも「うたの寺子屋」で教へられてゐます。つまり、國際化が強く要請されたり、右も左も見分け難い渾沌状態の時には、元に戻つて出發しなほすことが大切であり、それも魂に觸れる歌でわからせるといふことが藍川さんの行きかたです。今までの音樂教育に國語

教育が缺けてゐることの實例を擧げながら皆にも歌はせる講演會だつたので、參加者の誰もが楽しみながらの勉強になりました。

百撰刊行會といふ組織が「今昔秀歌百撰」といふ企畫を樹ててをり、百人の人に古事記から現代に至る和歌を撰び評釋してもらつてゐます。序文は本會の桶谷秀昭理事によるものです。過去の百人一首に無い和歌といふことが建前ですが、折角の文章がその方針のため残つたりしたので、拾ひあげて「秀歌百撰拾遺」として、この號に載せさせて戴くことにしました。この本、來年正月には出來上り、無償で配りますので、ご希望があれば送られます。

最近、ネットを通じて入會される會員もをりますが、それは當然のやうに若い人に限られます。一方で、古くからの會員は退場してゆく一方です。このあたりで會員をふやす努力をしなければなりません。このあたりで會員をふやす以前から日本に存在する、國語とゆかりの深い神社の方々にもつと多く賛助會員になつていただきたいものと、下記のような「勸誘狀」を御送りします。會員の方々も、お讀みいたゞき、賛同されたならば、本會會員募集のお役に立ててくださると幸甚です。

平成二十三年十二月

事務局長 谷田貝常夫

賛助會員入會の御願ひ

神社には、日本を救ふ力があります。

その神社の根元には、古代からの國語があります。

戦後の日本がかしくなつたのは、國語を壊したからです。

「抜い給い 清め給えー幸い給え」は國語ではありません。

「祓ひ給ひ 清め給へー幸ひ給へ」が國語です。

「國語問題協議會」はこの五十年の間、毀される前の國語を取り戻さんものと、營々とした努力を續けて來ました。

幸ひ、「國語を考ふる議員懇談會（通稱、國語議連）」が出來て、文部科學省などにも働き掛けが出来るやうになつて三年になります。

國難の今、このやうな日本の社會情勢の流れをとらへて、より多くの神社の方々の御協力を仰ぎたく、賛助會員としての入會をお願ひする次第です。

敬白

平成二十三年十二月

國語問題協議會 會長 小田村四郎

〓 正統表記のための実用工具紹介 〓

「國語國字」通巻DVD 本會會報創刊號（昭和三十五年）より第一八五號（平成十七年）迄の全頁をDVD

一枚に電子畫像掲載。

税込價格 一、二、六〇〇圓 書肆 横濱五十番館 (<http://literature.jp/>) 發行

「今昔文字鏡」單漢字16萬字版 ver.4.52 (CD—ROM)

UnicodeのCJKV漢字はもちろん、諸橋大漢和辭典収録の約五萬字、古くは甲骨文字から梵字、康熙字典の字形、中共の簡體字まで、多種多様な文字を収録。廣大な漢字世界を體系づけ、檢索、印字等その用途は無限！

税込價格 二、九、四〇〇圓 文字鏡研究会編 紀伊國屋書店發賣

正統國語ソフト「契沖」ver.19.1 歴史的假名遣、正漢字をパソコンで完全表現！

字音假名遣による同音異義語の打分けにも對應。

税込價格 二、八、三、五〇圓 有限會社申申閣 (<http://www.5a.biglobe.ne.jp/~keichu/>)

平成疑問假名遣（平成十七年版） 字音はもちろん動植物・地名人名、さらには企業名や専門用語まで、注意

すべき言葉をあまねく網羅。

最新の改訂は <http://homepage3.nifty.com/gimon/> 参照。

税込價格 一、五、七、五圓 國語問題協議會發行 紀伊國屋書店發賣

關聯電網

- 國語問題協議會 <http://kokugomondaikyo.sakura.ne.jp/>
國語問題點檢 <http://dhatenane.jp/kokugokyo/>
文語の苑 <http://www.O08.u-p.p.so-nel.ne.jp/bungsono/>
文字鏡研究會 <http://www.mojikyo.org/>
尙申申閣 (「契沖」) <http://www.5a.biglobe.ne.jp/~keichu/>
橫濱五十番館 <http://www.literature.jp/>
平成疑問假名遣 (高崎一郎) <http://homepage3.nifty.com/gimon/>
日本漢字教育振興協會 <http://www.kanji-kyoiku.com/>
石井式國語教育研究會 <http://www.isisiki.co.jp/>
高池法律事務所 <http://www.takaikae.com/>
地獄の箴言 <http://kimura39.txt-nifty.com/>
現代國語への處方箋 (蓮沼利夫) http://www.geocities.jp/kokugo_shohousen/
言葉の救はれ—福田恆存論 (前田嘉則) <http://logos.blogzine.jp/1/>

平成二十三年十二月十五日發行

創刊昭和三十五年十二月一日（通巻百九十六號）

編輯・發行 國語問題協議會

東京都大田區久ヶ原三丁目二十四の六

郵便番號 一四六一〇〇八五

電話 〇八〇―三四一一―五五〇一

電寫 〇三―三七五三一―四二九

電郵 yatagai@f03.ftscn.net

URL: <http://kokugomondai.kyo.sakura.ne.jp/>